

41749

教科書文庫

4
810
41-1938
20002/ 2022

Kodak Gray Scale



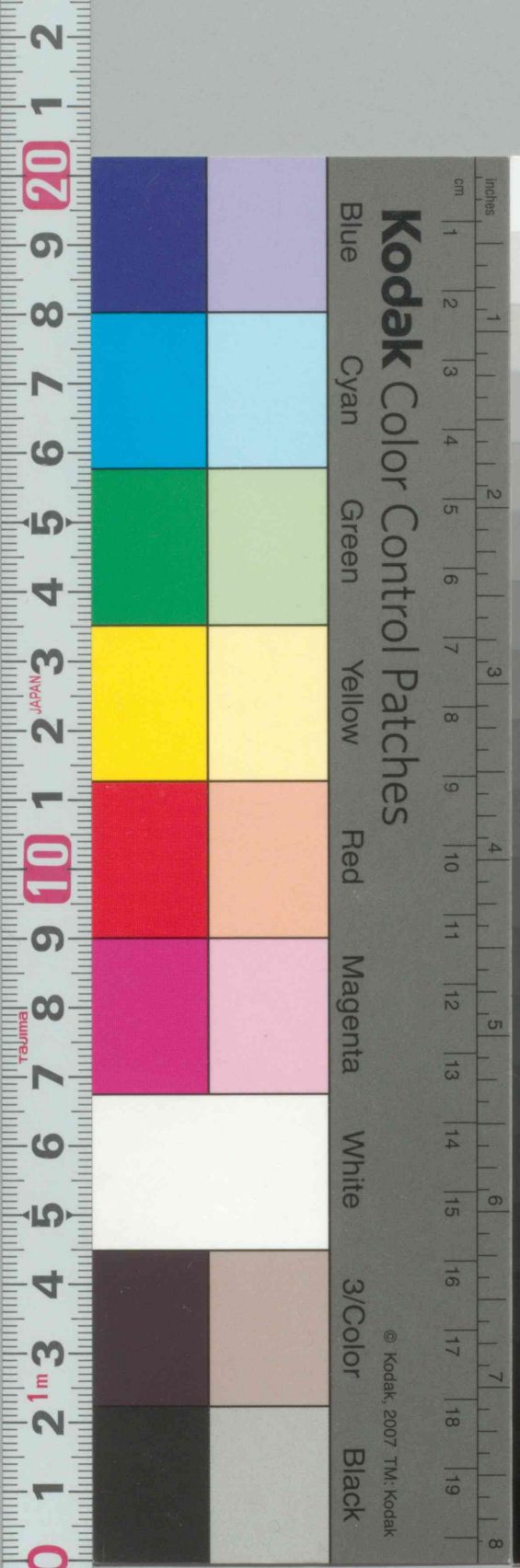
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
K011
資料室

中學國文

卷二



日一十二月二年三十和昭
科文漢語國校學中
濟定檢省部文

東京高等師範學校附屬中學校內
國語漢文研究会編纂

中學國文

卷二

東京
目黑書店發兌

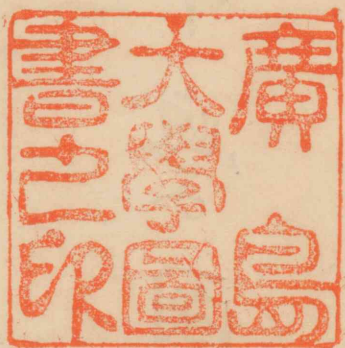
資料室

375.9
K011



筆折不村中

影倒の森



中學國文卷二 目次

一 御階のさくら	菊池寛	四
二 北畠親房	五十嵐力	五
三 鳥飼藏人	正岡子規	九
四 故郷	福田正夫	五
五 丘のほとり	(心)	六
六 停車場にて	鶴見祐輔	七
七 三都物語		

八 將軍と愛馬……………櫻井忠温…一〇

九 競技精神……………辰野保…一〇

一 日章旗の前に……………

二 英國民の願……………

三 スポーツマンの典型……………

一〇 修學院の秋……………大島正滿…一〇

一一 形見の鎧……………八波則吉…一〇

一二 森の繪……………吉村冬彦…一〇

一三 雀……………北原白秋…一〇

一四 知行合一……………南條文雄…一〇

一五 人間の三いろ……………福澤諭吉…一〇

一六 袴のうしろ悪しう候……………新井白石…一〇

一七 徳川光圀……………湯淺常山…一〇

一八 旅信……………五十嵐力…一〇

一 西山莊から……………

二 菅公配所の榎寺より……………

三 巖島より……………

一九 旅心……………白鳥省吾…一〇

二〇 日の出……………國木田獨步…一〇

二一 最後の授業……………菊地幽芳…一〇

三 國語と愛國心……………上田 萬年…二四五

目次 終



中學國文卷二

一 御階のさくら

孝明天皇御製

ほことりて守れものゝふ九重の

御階のさくら風そよぐなり

平野 國臣

數ならぬ身にはあれども願はくは

にしきの旗のもとに死にてん

平野國臣
福岡の藩士。幕
末の志士。元治
元年歿。

有村兼清
通稱は治左衛門。薩摩藩士。萬延元年三月三日井伊直弼を斬つて切腹した。

梅田雲濱
若狭小濱の儒者。幕末の志士。安政六年歿、年四十四。

吉田松陰
長州藩士。勤王家。事によつて獄に繋がれ、安政六年十月斬られた。年二十九。
頼三樹三郎
幕末の志士。頼山陽の子。安政六年歿、年三十五。

有村兼清

岩が根も砕けざらめや武夫の國のためにと思ひきる太刀

梅田雲濱

君が代を思ふ心の一寸ぢに我が身ありとも思はざりけり

吉田松陰

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬともとゞめおかましやまとだましひ

頼三樹三郎

浮雲のおほふ姿はかはれども

僧月照
京都清水寺成就院の住僧。幕末王事に奔走した。安政五年歿、年四十六。

橋曙覽
越前福井の歌人。明治元年歿、年五十七。

野村望東尼
筑前福岡の歌人。慶應三年歿、年六十二。

よろづ代おなじ天つ日の影

僧月照

大君の爲には何か惜しからん

薩摩の瀬戸に身は沈むとも

橋曙覽

國を思ひねられざる夜の霜の色

月さす窓に見るつるぎかな

野村望東尼

久方の照る日のもとの浮雲を

吹きはらひませ伊勢の神風

菊池寛
小説家。

二 北畠親房

菊池 寛

吉野朝には、楠木正成・新田義貞・名和長年・菊池武時などといふ忠臣がたくさんゐましたが、その中でも北畠親房は、代宮中に仕へた公卿の家に生れて、文學者として優れてゐたばかりでなく、戦にも強かつた人であります。

親房は五代の天皇に御仕へしました。特に後醍醐天皇に御親任が厚く、皇子世良親王の御養育係りを仰せつけられました。親王は御幼少の折から御聰明であらせられ、天皇の御寵愛も殊更深かつたので、親房は心をこめて御指導

五代の天皇
後伏見・後二條・
花園・後醍醐・後
村上の諸天皇。

申上げて居りました。ところが、その親王が御早世あそばされたので、親房は非常に歎き悲しみ、世を憐んで三十八歳



北畠親房

といふ若さで官を退き、入道して宗玄と名乗りました。そこで世の人々は、親房の世を捨てた心中は察して居りましたが、このやうに學識のすぐれた人物の埋もれることを、いかにも残念に思つて居りました。

親房は日本の神道は勿論のこと、佛敎・儒敎をはじめとして、司馬溫公の著した資治通鑑といふ歴史の書物などを盛に愛讀して居りましたので、歴史に

司馬溫公
支那宋時代の名
臣。
資治通鑑
支那の歴史。二
百九十四卷。

就いても非常に明るく、後年あの有名な神皇正統記を書いた譯もこゝに根ざしてゐたのであります。

佛門に歸依してからは、俗世を離れた靜かな生活に安住して居ましたが、建武中興の大業を成就せられた後醍醐天皇の御思召によつて、再び朝廷にお仕へして、天皇をお輔け申し上げることとなりました。その時の功勞に依つて、從一位准大臣の高位を賜はり、稀に見る忠臣として嘉せられたのであります。

元弘三年の冬、子顯家が陸奥守に任ぜられ、義良親王を奉じて、奥羽地方平定の大事業に就きました。この時親王は僅かに御年六歳、顯家は十六歳でしたから、親房はこれに附

義良親王
後醍醐天皇の皇
子。

從つて輔導の任に當りました。

二

建武中興に参加した武將の中にはほんたうに衷心より御仕へ申した者ばかりではなく、恩賞を目當の者も多かつたのです。過分の領地をいたゞきながら、なほも多きを望み、果ては私利私慾に目のくらんだ連中も少くありませんでした。野心家の足利尊氏は、かういふ輩をそゝのかして朝廷に背き、京都に攻入つたのであります。そのため吉野に避難あそばされた後醍醐天皇をお輔け申した親房は、逆臣尊氏討伐の大計畫をたてました。それは、奥羽の顯家に急を知らせて東より攻めさせ、北からは新田義貞が北陸道

五辻宮
龜山天皇の皇子
守良親王。

をまはつて、西からは五辻宮が九州の兵を率ゐられ、南からは吉野を中心とする大和・河内の官軍を以て、といふやうに、四方から京都を總攻撃する事でした。この計畫は成功して、尊氏は一旦西國に敗走しました。この戦に大功を立てた顯家は再び奥羽に下りましたが、この間に尊氏は西國にあつて兵を狩集め、またしても大舉して京都に押寄せて來たのです。再び勅命を受けた顯家は、兵を率ゐて西國に上る途中、先づ鎌倉で尊氏の子義詮よしかたを破り、畿内に入つて尊氏の軍に當りましたが、不幸にも敗れました。そして吉野に出ようとして奮戦中、惜しくも二十一歳の若さで、攝津阿倍野で賊の手に斃タれました。

宗良親王
後醍醐天皇の皇子。

この頃吉野朝の忠臣はつぎつぎに戦死を遂げ、柱石となる者は北畠親房一人といつてもよい有様となりました。このやうに、官軍振はず、賊軍の勢が京畿にさかんだつたので、親房はひとまづ奥羽に根據地を求めようとして、義良親王をはじめ、宗良親王むねなが・五辻宮を奉じ、鎮守府大將軍となつた。次子の顯信と共に、伊勢より海路をたどつて出帆しました。上總沖に差ししかつた時、大暴風に遭つて、一行の船は木の葉の如く弄モテアソばれ、別れくに思ひがけない方向へ流されました。親房の船は常陸ひたちに漂着しましたが、義良親王と此の時の大將顯信の船はもとの伊勢へ、宗良親王の船は遠江へ、五辻宮の船は四國へと、それごとく吹戻されました。

常陸に上陸した親房は、この大打撃に少しもひるまず、小

勢の部下を率ゐて、筑波

山麓の小田城に立籠り、

また、く間に常陸から

下總にかけて強大な勢

力を振ひはじめました。

しかし悲しい事に、この



小田城址の碑

時遠く吉野に在らせられた後醍醐天皇が崩御せられたといふ知らせを受けました。延元四年八月十六日のことでした。天皇は、力と頼む親房の許に、後村上天皇となられた義良親王を御たすけ申し上げよと御遺言遊ばして崩せら

れましたが、遠く離れた邊境にあつて、皇軍の勢を擧げるのに日も夜も苦心慘憺してゐた親房は、口惜しくもお手をとつて御指導申上げる事が出来ませんでした。この時全身からほとばしる熱誠を傾けて書上げたのが、神皇正統記であります。

三

さてこの書物は、親房が吉野朝の旗色が悪く、西に東に轉戦するといふ、極めて危険な位置にあり、枕を高くして寝る暇もない戦場で、殆ど何の参考書もなしに、自分の腦裡にある豊富な歴史の知識を傾け盡くして、書上げたものであります。

その内容とする所は、神代より始めて後村上天皇に至るまでの神々の御徳、天皇御代々の御事蹟を述べ奉り、建國の由來を明かにし、大義名分を正し、國體の尊嚴を明示したものであります。それ故本書は、君の御爲には御治世の御心得となり、臣下にとつては日本國民たるの自覺を促したものと云ふべきで、萬世不滅の史書といつても差支ありません。

平常彼が修めた所の儒學や佛教の深く廣い知識をかりて、三種の神器に獨特の解釋を加へ、光輝ある日本精神を正しく説き明かしたものであります。

親房の知識は廣く印度・支那に亘つてはゐましたが、しかも日本の國體の尊き理由を確信し、この立場から我が國の過去・現在・將來をはつきりと見通してゐました。かうした本は、それまでに無かつたと言つてもいゝ位です。この亂れた世の有様に悲觀せず、宇多・醍醐・村上天皇の輝かしい理想にみちた時代が再び將來に實現する事を信じ、繰返し繰返し力強く主張して、正義は結局勝利を占めるといふことが國史の大道であることを述べて居ります。

この書に盛られた親房の精神は、彼の家臣によつて次から次へと傳へ擴げられ、當時吉野朝の正系であることを信ずる人々に、異常な感銘と興奮を投げ與へたばかりではありません。三百年後の水戸光圀をして大日本史を編纂せ

大日本史
三百九十七卷。
神武天皇より後
小松天皇に至る
までの歴史。

讀史餘論
十二卷。國史上
の大勢について
論じたもの。

日本外史
二十二卷。源平
二氏より徳川十
一代將軍家齊に
至るまでの武家
の歴史。

しめたのも、新井白石をして讀史餘論を書かせたのも、そし
てかの勤王思想家頼山陽に日本外史を著さしめたのも、實
にこの親房の神皇正統記の熱烈な精神なのであります。
その正しい見解と情熱は、これ等の書物を通じて、尊王討幕
の思想の有力な根柢となり、ひいては明治維新の大運動を
起すのに大いに與つて力があつたのです。「筆は劍よりも
強し」といふ言葉通り、親房の筆は、いつか朝敵を倒して、六百
年後に、輝かしい王政復古を現出したと言つてもいいので
す。
(日本人)

五十嵐力

國文學者、文學
博士。

白河
福島縣西白河郡
白河町。

三 鳥飼藏人

五十嵐 力

奥州の白河に鳥飼藏人といふ弓射の名人があつた。或
日諸國行脚の老僧が訪ねて来て、御主人に御目に懸りたい
と云つた。藏人はすぐに逢つた。老僧は慇懃に挨拶して、
「拙僧は御高名を慕つて遠國から參つたものでござる。
近頃不寐なる御願ながら、生涯の思出に貴殿の御射術を拜
見させて戴きたいと思ふが、叶ひますまいか。」
と頼み入れた。藏人は快く承諾し、やがて老僧を誘つて弓
場に立つた。藏人の顔には誇の色が見えた。
「では、拙い藝を御覽下さい。」

と云つて、弓を取つて矢を番へた。同時に、茶碗になみくと水をついで左の臂に載せた。第一矢を放つたと見る中に、二の矢が継ぎ、三の矢が継ぎ、四の矢、五の矢、六の矢、七の矢が繼いだ。前の矢の筈に後の鏃が相接して、數本の矢がただもう一本のやうである。そして此の瞬く隙もなき働の中に在つて、藏人の身體は造り据ゑた石像のやうに泰然として、臂の上の茶碗の水はさゞ浪だに立たなかつた。一々の矢が的のたゞなかを射たことはいふまでもない。老僧は感嘆して「あゝ」と云つたが、やがてつぶやいて、「しかしまだ弓射の弓だ。神に入つた技ではない。」といつた。藏人は聞きとがめて、

「御僧、何とおつしやりました。」

と尋ねた。老僧は、「いや、詞で御答は出来ませぬ。拙僧と一しよに山へ御出で下さい。」

と云つて先に立つた。藏人は弓矢を携へて従つた。

二人は遂に高い山の絶壁に攀登つた。斷崖は一面に苔むして、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仞の淵が泡を立て渦をまいて居る。そして足がかりの岩角は辛うじて爪先を托するに足るだけである。

老僧は先に立つて、悠然として藏人をさしまねいた。見れば藏人は色が青ざめ、足がふるひ、そして冷汗は衣をしぼ

つて、踵まで濕して居る。老僧は云つた。
 「足がかりは此の通りの大磐石で、向ふには松が枝に鳶が
 止つてゐて、無類の的でござる。さ、御弓勢を御示し下さい。」
 藏人は答へなかつた。老僧は言葉をついだ。
 「藝に至つた者は、我を去り天地に同じて、どのやうな高い
 山深い淵に臨まうとも、神氣の變るものではない。然るに
 御事は、前には誇る色があり、そして今はおどろして居ら
 れるではないか。まだ一御奮發を要ませうぞ。」
 藏人は我慢の夢を覺まして、再び懸命の修行をした。そ
 して遂に驕ることなく恐るゝことなき至上の達人となつ
 た。

(甲鳥園隨筆)

四 故 郷

正 岡 子 規

正岡子規
 名は常規。俳人、
 歌人。明治三十
 五年歿、年三十
 六。



正 岡 子 規

世に故郷ほど戀しきはあらじ。

花にも月にも、喜にも悲
 にも、まづ思ひ出でらる
 るは故郷なり。故郷は、
 學問を究め見聞を廣く
 するの地にあらず。さ
 れど故郷には歸りたし。
 故郷は事業を起し富貴
 を得るの地にあらず。さ
 れども故郷には住みたし。
 兩親
 姉妹あるが爲に故郷に歸りたしと思ふもあらん。我が親

故郷
愛媛縣松山市。

はらからともには今は故郷にあらねど、なほ故郷こそ戀しけれ。都にありて世を厭ふが爲に故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまで世を厭ふふしもなきに、なほ故郷こそ戀しけれ。

思へば十餘年の昔はやり氣の抑へがたくて單身故郷を出て行かんとこそは勇みしかど、いざ首途といふに、一滴の熱涙の覺えず頬のあたりに流れ來るを見送の人に見せじと顔そむけたる苦しさ、何やら胸につかへたる心地なりき。母親の乳房と故郷の土とは、離れ憂きものなりけり。

故郷近くなれば、城の天守こそ先づ目を喜ばす種なれ。低き家、狭き町、淋しき松並木、丈高き稻の穂、鼻の先に並びた

る山々、幼き頃より見馴れたる一軒家、見るもの皆莞爾として我を迎ふるが如く、何れ懐かしからぬはなし。

先づ身よりの家々をこゝかしこと訪れて、久澗の情を述べれば、年老いたる婆様の笑聲、瘦せたる叔父、肥えたる叔母、よく居睡する女中の顔さへ見覺えたるまゝに、少しも變らず。さて變らぬは故郷よと思ふも、歸り着きたる瞬間にあり。

變らぬはめでたけれど、全く變らずば何の面白きことかあらん。變らずと見る中に、いさゝかながら彼も此も變り行きたるこそ、なかくに聞きて見てゆかしけれ。人の上につきて第一に變りたるは、わが従弟妹の數のふえたと、

其の大人となりたることなり。「都の人こそ來給へれ、われも其の顔見ん」などひしめきあひ、わが前に跪きて禮を述ぶるもあれば、襖の隙より恥づかしげに窺ふもあり。幼き兒のはじめて見たる顔もあり。さあらぬも幼顔のおもかげをおほるげにとめて、振分髪の子まげに變りたるも少からず。かつて見し時には、小學讀本を高らかに讀みあげて、誇りに人に聞かせたる男の子の、今ははや時事を談じ、外國の事情を説くほどになりたるもあり。唐黍の殻にてこしらへたる雛を箱の上に並べて、人形遊に餘念なかりし女の子の、年は嫁ぐべくなりて、わが膝元に茶を汲みて置きながら、顔も得あげて退きたるなど、思へば彼方よりは、我を

もしかく年とりたりと見るらんと、獨り心に恥づること多かり。

戸の外に出づれば、標札したるいかめしき家どもは、大方聞き知らぬ人の名を示せり。幼き時よりなじみになりし本屋は昔の様子ながら、見なれぬ丁稚は我を十年前の華客とも知らず、よそ／＼しくもてなしたるも本意なく覺ゆ。かねて知りたる道具屋はあらぬ店となりて、淋しかりし武家町の角に、賑々しく商店の軒を並べたるもあいなしや。いで菩提所に詣でて久しぶりに香をも手向けんと辿り行けば、山門半ば崩れて、一條の汽車道は其の傍を横ぎれり。驚きて少し左に曲れば、數百の墓累々として、まだ荒れはて

しにはあらねど、かの鐵路にへだてられて、寺の境内をはなれたれば、父君・祖母君などの墓のうしろは、一步ならぬに粟黍など秀でたり。一目見るよりも覺えず目をしばたゝきぬ。

栗の穂のこゝを叩くなこの墓を
嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。

(子規全集)

福田正夫
詩人。

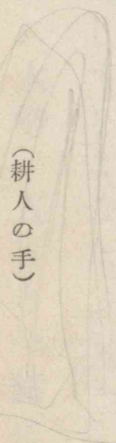
五 丘のほとり

福田 正夫

秋風の丘のほとり
紫色の夕空さびしく光り
地は山々まで靄につゝまれ
坂を下る農夫のすがたが
静かな影繪をゑがく
はだかの子供が一人
まだ鍬をふつてゐる
黒い土が崩れ 碎け 散る

その背景に海が
 森の上を越え
 廣くく遠くひろがる
 秋風はその海の上をも
 渡つて來るであらうか
 海は黒く光り
 青く疲れた水の色が
 空の暗さと映り合ふ
 鮮かな山の端の黄金なす光
 それらがうすぼやけて來ると

子供は「おゝいと隣の畑に呼びかける
 見えなかつたその父が
 ひよくりと豆畑から立上り
 「もうしまふべえよう」と
 のろくと歩みを移して來る
 空も暗くなつた
 風も寂しくなつた
 私も晝中の一人のごとく
 うすぐらい丘の路を
 物思ひつゝ下り行く



(耕人の手)

六 停車場にて

昨日福岡から電報で、そこで捕へられた重罪犯人が、今日裁判の爲に正午着の汽車で熊本に送られるといふことを知らせてきた。一人の警官はその罪人護送の爲に福岡へ出張してゐた。

思へば四年前のこと、一人の強盜が相撲町の或家に忍び入つて、澤山の貴重品を奪ひ去つた事件があつた。警官に巧みに追跡されたので、贓品を賣捌く間もなく、直ちに捕へられてしまつた。しかし犯人は警察署へ送られる途中、鎖を切り、巡査の劍を奪ひ、彼を殺して逃げた。先週まで、それ

相撲町
熊本市下通り。

以上、その盜賊のことについては何もわからなかつたのである。然るに熊本の探偵が、たまたま福岡監獄を見に行つたとき、彼は彼の腦裡に四箇年寫眞を焼付けたやうになつてゐたその囚人の顔を見出したのである。探偵は看守に向つて、「あれは誰です」と尋ねた。

「こゝでは草部と記入されてゐる竊盜犯です」と看守が答へた。探偵は囚人に近づいた。

「お前の名は草部ぢやない。おい野村貞一、お前は殺人犯の件で熊本へ御用だ」といふと、不意の語に駭いたその重罪犯人は、思はず罪状をすつかり自白してしまつた。

私は囚人の到着を目撃するために、大勢の人々と一緒に

停車場へ行つた。私は群集が殺人へなげる憤怒を聞き、その情景を観る覺悟をしてゐた。そして暴力の行はるべきことをさへ恐れてゐたのであつた。

殺された警官は大層人望があつた。その親戚は必ずその見物のうちにあるであらう。群集の心も決して穩かとはいへない。そして澤山の警官が彼の警戒にあたつてゐるだらうと私は思つた。然るに私の豫想はまちがつてゐた。

停車場はいつもの通りの忙しさと騒がしさであつた。下駄をはいてゐる乗客の急ぎ足、からこると鳴るその音、新聞とラムネを賣らうとする子供の呼聲のうちに、汽車は止

まつた。私どもは埒の外に殆ど五分程待つてゐた。その時警官に伴なはれて、罪人が改札口から押されて出て來るのが見えた。彼は頭をうなだれて、うしろ手に繩でしばられてゐた。粗野な様子の、大きな男である。罪人と警官と兩方とも改札口の前にとまつた。人々は前に押出て、しかし黙つて、見ようとした。その時、警官は大聲で呼んだ。

「杉原さん、杉原おきびさんは來てゐますか。」

すると、背中に子供を負うて私のそばに立つてゐたほつそりした小さい女が「はい」と應答して、人込みの中を押しわけて進み出た。それが殺された人の寡婦であつた。背負うてゐた子供は、その人の息子であつた。役人の手の合圖

で群集は引下つて、囚人と護衛とのために、その周圍に場所をあけた。子供をつれた女は犯人と面して立つた。其の刹那の静かさは、全く死の静かさであつた。役人は、その女にではなく、子供に向つて話しかけた。低い聲ではあつたが大層はつきりしてゐたので、私は一言一句聽取ることが出來た。

「坊ちゃん、これが四年前にお父さんを殺した男です。あなたはまだ生きてゐなかつた。あなたはお母さんのおなかにゐたんです。今あなたを可愛がつてくれるお父さんのおないのは、此の人の仕業なんです。御覽なさい」と役人は罪人の顎に手をやつて、嚴かに彼の眼を上げさせ、よく御覽

覽さない。坊ちゃん。恐ろしがるには及びません。厭でせうが、是もあなたの務です。よく御覽なさい。母親の肩越しに、男の子はばつちりあけた眼で、恐れるやうに罪人を見つめた。そして俄かにすゝりなきを始めた。涙が下る。併し罪人の畏縮しようとする顔を、男の子はしつかり従順に、且眞直に、じつと見て見て見ぬいた。群集の息は止つたやうであつた。罪人は、顔を歪めると突然鎖も構はず倒れて跪いてしまつた。そして聞いてゐる群集の心を震はせるやうな、悔恨の情極まつたしやがれ聲で叫びながら、砂に顔を打ちつけた。

「ごめんなさい、ごめんなさい。許して下さい、坊ちゃん。」

あんなことをしたのは、怨があつてしたのではありません。逃げたさの餘り、恐ろしくて氣が狂つたのです。大變悪うございました。何とも申譯もない悪いことを致しました。しかし自分の罪のために私は死に行きます。死にたいんです。喜んで死にます。だから坊ちゃん、どうか私を憐んで下さい。堪忍して下さい。子供はやはり黙つて泣いてばかりゐた。やがて役人は震へてゐる罪人を引起した。沈黙してゐた群集は、彼等を通すために急に左右に分れた。そして突然すゝり泣を始めた。日にやけたその警官が通つた時には、私も嘗て一度も味

はつたことのない、この涙ある場面の感激にうちふるへた。私はめつたに人の見ない、恐らくは再び見る機會のない、この日本の美しい警官の涙を見たのであつた。



小泉八雲

やがて群集は思ひくりに退散した。私は獨り残されたまゝ、此の光景の生んだ不思議な教訓に、深い默想に沈んでしまつた。いふまでもなく、これは

罪惡の結果を悲痛に示すことに因つて、罪惡そのものを知らしめたのであつた。そしてまた、罪人がその死の前に、只

容赦を希ふ絶望の悔恨がそこにあつた。凡てを理解し、凡てを感じ、悔悟と慙愧とに満足して、憤怒ではなく、たゞ、罪に對する悲哀のみを以てみたされたる群集がそこにあつた。

この一小話のうち、最も著しき東洋的な事實は、どの日本人の魂の底にも一大分子となつてゐる、子供に對する親の潜在的愛情に訴へて罪人に悔恨を促したといふことであつた。

(小泉八雲心による)

小泉八雲
舊名ラフカヂ
オ、ハーン。イ
ギリスから歸
化。東京帝國大
學講師。明治三
十七年歿、年五
十四。

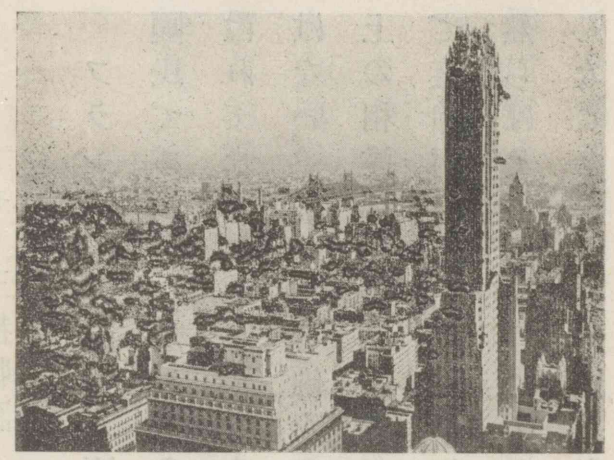
鶴見祐輔
思想家。

七 三都物語

鶴見 祐輔

○フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。しかしその勤勉さには相違があるやうに思はれてならない。勤勉それ自身に本質的の差があるわけではない。しかし英佛人の勤勉性の差は、單に外形的な形式上の相違だけではないやうに思はれる。それは一歩進んで英佛兩國の國民性の相違から來るのであるまいか。然らばその國民性はいかに相違してゐるのであらう。こんなことを考へながら、私はよく一人でパリの公園を歩いて居た。更にこれにアメリカといふ國を今一つ加へて、三

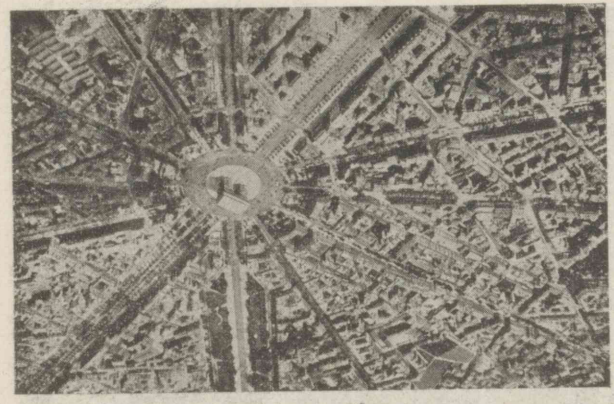
國の國民性を比較して見た。



に躍動するのを意識せずにはゐられない。ニューヨーク

三國の特色は、その國の大都會の比較に於て著しく眼に着いて來る。何となれば、其の國の都は其の國の國民性を一番鮮かに映し出して居るからである。ニューヨークは餘りにヨーロッパ化してゐると多くの人がいふ。しかしニューヨークに一日居れば我々はアメリカの大空氣の全身

はやはりアメリカである。そしてロンドン



フランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を灑いだりし

クラーク
事務員。



ロンドン

てゐる。
ロンドンの下町に晝頃ゆくと、狭い側道の主に、商館や銀行のクラークか見える若者が、帽子も冠らずに、何百人となく忙しげに往来してゐる。自分はこの群の中を縫ふやうに歩きながら、遠い南アフリカや印度の貿易を算盤で弾き出して居るこの人々の日常生活を考へた。そしてフランス人とは種類の違ふこの人々の

クールヴァン
フランスの女流
小説家。

勤勉さを考へた。

こんな時には、いつもフランスの小説家のクールヴァンの言葉が頭に閃めく。「フランス人は蜜蜂の如く勤勉に、イギリス人は蟻の如く精勵である」と。パリとロンドンとの生活を見てゐるうちに、この言葉の深い意味が、日一日と自分の脳裡に深く沁みていつた。晴渡つた初夏の陽の下に花から花へ隙もなく蜜を求めて飛んで行く可憐な蜜蜂の勤勉が、いかにもよくパリ人の朝起の心持を現してゐるやうに思はれた。そして来るべき冬の支度に忙しく營々として重い餌を引きずつてゆく健氣な蟻の精根がよくイギリス人の勤勉を現してゐるやうに

觀音堂
東京市淺草公園
内の金龍山淺草
寺。

思はれた。それでアメリカ人のあのいらくした忙しさは何であらうと考へて見た。私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩が浮んで來た。何時いつて見ても、大勢の人込の中で幾十百羽の鳩が我劣らじと押合ひへしあひ、地に落ちた豆を拾つてゐる。物音に飛立たうと半分氣を外に配りながら、それでも眼の前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、目の色を變へていつまでも餌を拾つてゐる。アメリカ人の勤勉は、この鳩のやうに忙しく餘裕無く私には考へられた。朝の出勤時間頃にニューヨークの地下鐵道に乗る人は、これがこの世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれるや

うな混雜を目撃する。或日私は汽車の切符を買ひに市内營業所に行つた。大勢の客が群集してゐた。係の若い米國人が、私の行先と列車とを聴取り、やがて右手の袖を一寸捲り上げて、鉛筆持つたその手を、切符の紙の上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣にとられて見てゐると、この男が忽ちその手を憂と紙の上に落して、するすると切符の文字を目の廻るやうな速さで書終へた。つまり今手を振つたのは、その手に運轉をつけるためだつたのである。私は吹出すやうな可笑しさを感じた。なにもさう手に運轉をつけないでも、大した時間に相違なく字が書けるであらうし、又運轉をつけてゐる時間だけ餘分のやう

な氣がした。その翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金引上の表を貫ひに行つた。すると、係の若い英國紳士が、「たしかこの机の中に一枚だけ統計表があつたはずだ」と言つて、自分の机の抽斗ひだを開けた。私は見るともなくその抽斗の中を覗き込んで驚いた。まあ、なんとといふ書類の雜沓であらう、累々と種々な紙片が堆積されてある。それを件の若紳士は、手を突込んでがさ／＼とかき廻して、「こゝにはない」といつて、次の抽斗、また次の抽斗を開けた。そして最後の抽斗の底から、やつと件の賃金表を見つけ出した。「これは差上げるわけにいかないから、こゝで見てくださいまいか」といふから、一

度見ただけではとても覺えられませぬね」と言ふと一寸當惑して、「それでは私が寫してあげませう」といつて、それを別の白紙に筆寫し始めた。ニューヨークなら傍にゐる若い女のタイピストに命じて、一分間で寫しが出來上るところである。ところが件の英國紳士は、自分の机の上の大きな吸取紙の上に先づ原本の統計表を置いて、その又上に白紙を置いて書出した。私は一寸面喰つた形で、この奇妙な淨書法を見物して居た。すると彼はまづ白紙の上に數字を一行書いた。そして今度はその白紙を左手で持上げて、下になつてゐる原本を覗いて、次の行の數字を暗記して、また件の白紙をその上にべたりと置いて、暗記しただけ書いて、

また前のやうに紙を持上げて原本を覗いて、又その上に重ねて書いた。不思議な遣方であると私が感心して見てみると、やがて書き終つた。インキが乾いてゐない。そこで今度はその紙とその下の原本と二枚持上げて一番下積になつてゐる吸取紙の上に裏向に置いて、丁寧にインキを拭き取つて、さて私にその浄書をくれた。ニューヨークから着いたばかりの私は、全く呆氣にとられて此處を出た。そして幾度となく鉛筆持つ手を振つて運轉をつけて猛烈な勢で切符の文字を書いたアメリカ人と較べて考へて見た。その春バリの郵便局に書留小包を出しに行つた。慣れない私が、誤つて受取人の欄へ自分の住所氏名を、差出人の

欄へ先方の住所氏名を書いた。それを局の小窓から差出す時、私はふと氣がついて、「おや」といふと、局員のフランス人が「宜しい。」と言いつつ、つとペンを取り、受取人といふ字を抹殺して差出人と書き、差出人といふ字を消して受取人と書いた。なるほどこれで書類は完成したわけである。しかもそれがあつといふ一瞬間であつた。私は全く感服してしまつた。そしてニューヨークの切符賣と、ロンドンのお役人と、バリの郵便局員とを頭の中で列べて見た。——
鳩と蟻と蜜蜂と——。

(三都物語)

櫻井忠温
陸軍少將。

八 將軍と愛馬

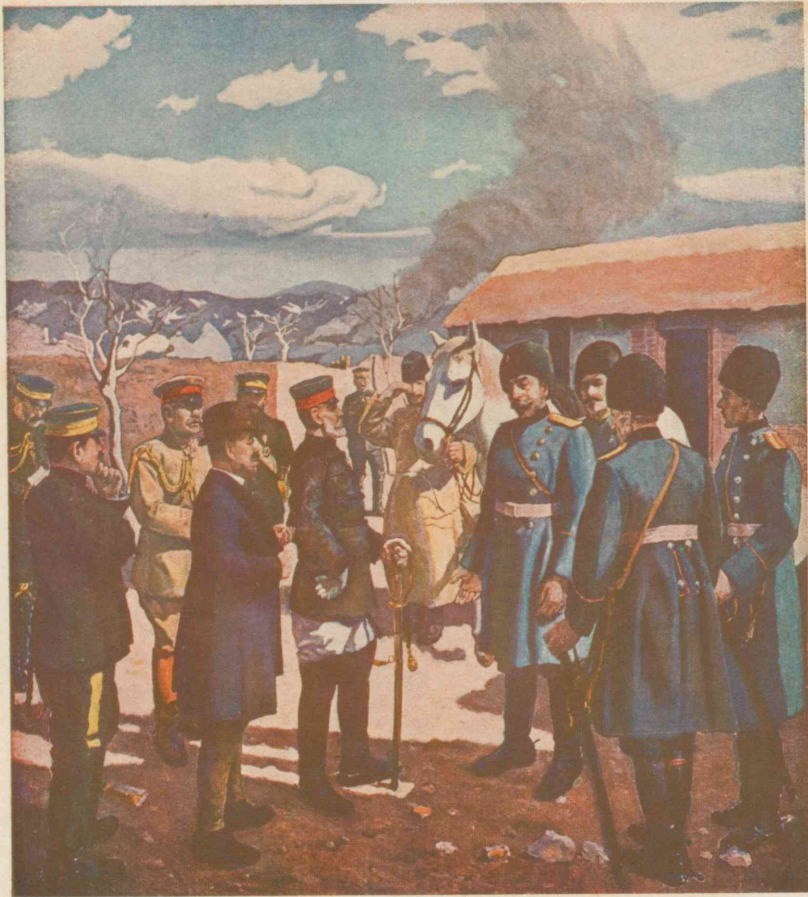
櫻井忠温

一

日露戦争がすむと、凱旋行軍が東京で行はれた。その時各軍司令官は馬車に乗つて行軍の列に加はつたが、ひとり乃木將軍は馬に乗つて歩いた。馬車に乗るやうにとすゝめたが將軍はどうしても聞かなかつた。そして將軍は副官に「馬にも凱旋の喜をわけてやりたいからかう。」といつた。

二

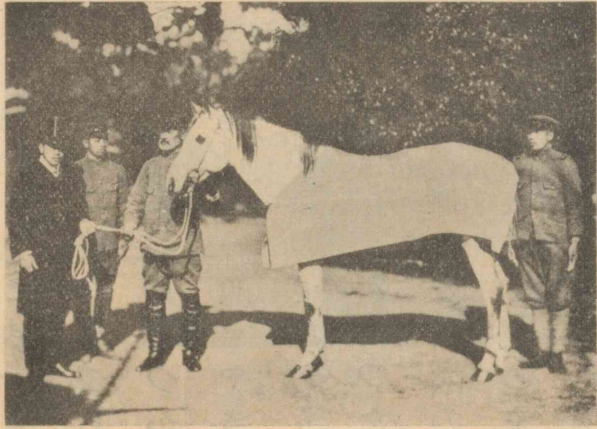
ある日、鳥取縣東伯郡以西村の佐伯友文氏の家に、將軍夫妻が訪れた。



藏所館畫念記德聖宮神治明

城開順旅役露日

旅順
要塞地。日露戦
争當時はロシア
の租借地。
ステッセル
當時旅順要塞地
區司令官。



乃木將軍と壽號

將軍は茶をすゝりながら佐伯氏に馬のその後の様子を聞いた。佐伯氏は、馬は至つて達者で、たくさんの子馬が出来たとなどを話した。將軍はそれを聞いて非常に喜んだ。

しばらくして、將軍は佐伯氏に案内されて厩に行つた。そこには白い馬が長い睫毛をしばたゝきながら、四本の脚を行儀よくそろへて立つてゐた。

それは將軍が旅順でステッセルから贈られた馬で、ステ

ッセルの名に因み、壽號と命名したものであつた。壽命を完うするやうにといふ意味でもあつた。

將軍は壽號の鼻づらを撫でながら「お前も無事でいゝのう」といひながらなつかしさに見入つた。

馬は將軍の顔をやさしい目で見つめた。舊主のことを思ひ出したのであらう。將軍夫妻は馬に草など與へて、別れがたさうに立去つた。

この壽號が佐伯氏の手で育てられるやうになつたのは、佐伯家が代々勤王の家であり、又熱心な牧畜家であつたので、壽號の終を完うしてやりたいといふ將軍の考からであつた。

將軍が佐伯家に壽號を贈つた時、次のやうな意味の略傳

を添へた。

馬はアラビア種である。左前脚に傷があるが、それはス氏が戦線巡視中、日本軍の砲彈の破片が岩にあたり、その破片を受けたものである。ス氏から贈られた時は跛行してゐたが、數箇月後に癒つた。性質は極



號木乃と軍將木乃

めて順良、爆彈の音にも驚かなかつた。ス氏は戦場でもこの馬に乗つてゐた。明治三十九年四月、青山練兵場で行はれた凱旋大觀兵式の際には、余の乗馬として天

青山練兵場
東京市赤坂區青
山に在つた。

覽を賜はつた。三、壽號の子のうちの一頭が乃木號と命名されて將軍に飼はれてゐた。

將軍は自刃の朝、盆にカステラを山のやうに載せて既に行つた。馬は丁度秣を食つてゐて、カステラを見向きもしなかつた。將軍は盆を持つて歸つて行つたが、しばらくして又厩へ入つて來た。馬は將軍の手にあるカステラを見ると、前搔をしてそれを欲しがつた。將軍は馬にカステラを與へながら、鼻づらを撫でて別を惜しんだ。(將軍乃木)

自刃の朝
大正元年九月十
三日朝。

辰野保
大日本體育協會
役員。

九 競技精神

辰野保

一、日章旗の前に
大正十二年五月、日支比三國の極東選手權競技大會が大
阪で開かれました。

日本軍の勢物凄く、既に優勝は確實でありましたが、最後の日に愈、呼物の廿六哩マラソンレースが行はれました。此の競走に参加した一人に、岡山縣の長谷川照治といふ青年があつたのです。其の日は雨上りの實に蒸暑い日で、正午競技場にスタートを切つてから、長谷川君は地方青年に見る一本氣の眞面目さで、常に先頭を切つて、廿六哩の長い

コースを見事に走破しまして、萬雷の如き歡呼の中に、今や競技場に歸つて來ました。然し不幸にして其の時は既に此の勇者は殆ど其の精力を消耗し盡くして、視力さへも殆ど失つたかのやうでありました。其の中に、彼は競技場の半ばごろまで來ますと、俄かに氣を失つて其の場に打仆れてしまひました。折角こゝまで先頭を切つて來たものと、場を埋めた何萬の觀衆は、あと三百米ばかりに迫つた決勝點まで、何とかして彼を再び起たせて走らせようとして、狂氣の如くなつて、或は其の名を呼び、或は柵外より聲援をしましても、國際競技規則によつて、競技者の身體に觸れる事を絶対に禁じられてゐます以上、仆れ臥した長谷川君を

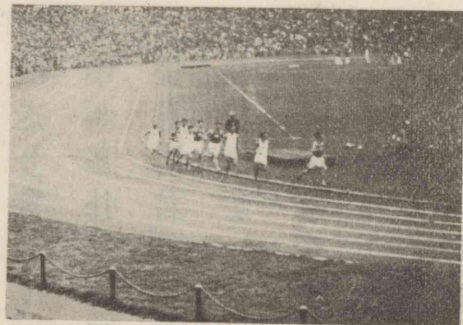
再び起して走らせる方法は、到底見出し得べくもなかつたのであります。

野口源三郎
教育家。

恰度其の時であります。當時の役員の一人、野口源三郎君は走り寄つて、一ふりの日の丸の小旗を取つて、これを柵の中から仆れた長谷川君の眼の前に持つて行つて、
「長谷川君、日本のためにやつてくれ」といひながら、一振り振つたのでした。すると、今まで全く生氣を失つてゐた長谷川選手は、すつくと起上つた。そして野口君が日の丸の旗で指す方に、彼はとぼくと走り出したではありませんか。見物人は此の悲壯な光景を見てほんたうに泣きました。彼は又仆れた。再び日の丸の旗は振られた。彼は又

起上つた。そして三度仆れて、竟に彼は決勝點に入つたのであります。何萬の觀衆は、一人として面を上げて、よく此の光景を正視する者はありませんでした。

我々は今日も尙其の當時を偲ぶと、眼の底が熱くなるやうに感じます。我々は其の日、其處に眞の日本を見たのです。日本にも實にいゝ選手があるではありませんか。



スーレンソラマ

二 英國民の願

昨年パリの世界オリムピック大會に参加した英國の選

昨年
大正十三年。

手が愈、倫敦を出發するに際しまして、倫敦市民の代表者は選手一同を集めて、我々は、諸君が今回パリに集まる世界各國の競技者の中で、最上の競技者である事をのみ望む。我は勝敗の歸趨はもとより問題としてゐない。唯雄々しく眞の競技者として戦つてくれたと聞く時に、我々英國民は其の温かい手に諸君を迎へるであらう。といふやうな送別の辭を一同に呈して居ります。

神聖なる競技者といふ事、神聖なる競技といふ事、即ち非職業選手といふ事が、如何に彼等の強い願であるかといふ一事は、かくの如く事毎に現れてゐるのであります。

三 スポーツマンの典型

同じくパリの大會で世界各國のオリムピック競技委員が集まつて、色々今後の打合せや相談をした時に、アメリカの委員から、今後百米二百米といふやうな短距離競走は、決勝點に活動寫眞機械を据ゑつけて、其の決勝點の光景を撮影し、それによつて着順を決めようではないかといふ提議を致しました。席に列なる各國の委員も、永年此の問題には一方ならず苦勞してゐる處であるので、大體承認の意思を表示して、それに評議が決らうとした時に、一隅に控へてゐた英國の一委員が立上つていひました。

「不幸にして審判者に、假に、若し萬一誤があつたとしても、多くの審判者がかうだと審判した場合、競技者自身は自己の主張の理由あるを信じて、笑つてそれに服従するといふ、其の精神が競技者の本分、競技者の精神といふものではなからうか。」

滿場は肅然襟を正して此の議論に同意し、アメリカ委員の提議は其の場に撤回せられたといふ話を聞きました。我々は、日に、昂まつて行く日本の競技熱、竝に其の記録を思ふ時に、希くは日本の競技を愛好する人々が、單に競技の形の上に囚はれずに、競技者の精神の眞の意義を體得して、形式内容共に充實した道程を進まん事を希ふものであります。

私は選手たる前に、人間たる事の更に急務なるを思ふの

であります。魂の失せた者によつて得られた幾十幾百のメダル・優勝盃、それは唯單に歳晩の都大路を彩る福引の景品に過ぎません。競技者の眞の精神を解せざる者によりて残されたる優秀なる記録は、唯馬や兎が競技場に紛れ込んで作つた記録に外ならないと思ひます。

(スポーツ隨筆)

私たちはスポーツによつて職業を求めようとするのではありませぬ。修養のためにこれを行ふのであります。健全な心を健全な身體に宿らせ、人間として正しく明朝に生きて行くためにこそ、スポーツを行ふのであります。

(飛田穂洲)

修學院

京都市左京區にある離宮。後水尾法皇の時造營された。

大島正滿

理學博士。

後藤新平

大正十二年大震災直後の内務大臣。昭和三年歿。

ハイスクール日本の中學校に相當するアメリカの學校。

一〇 修學院の秋

大島 正滿

大震災後の帝都復興の大計畫を立てるために、後藤新平伯の顧問として招聘されたのは、コロンビア大學にその人ありと知られたベアード博士であつた。短い滯留期間に、家族に日本を學ばせるのも活きた教育になると考へた博士は、夫人・令嬢のほか、當時ハイスクールの生徒であつた十五歳の令息を伴つた。滯京一年餘りの間に、多趣味な博士は、能の研究もやれば、歌舞伎へも出入する。いよゝゝ日本に別れを告げる頃には、博士もその

家族も一かどの日本通になつてゐた。ところで、その令息は子供にも似合はず鋭い科學的頭腦の持主で、アメリカ魂とでも云ふのであらうか、物質の世界、科學の世界以外の事物には目もくれぬと云ふ變り種であつた。

ある時、筆者が博士や夫人と歡談を交へてゐた折のことであつた。話ははずんで演劇の問題に移つたが、何を思ひ出したか、令息ははゝゝと笑ひ出した。そして云ふには、「日本の芝居に出て来る馬ほどをかしの動物はない。口をあけて上下の顎をばくく」と噛み合はせるではないか。馬といふ動物は、上下の顎を左右に動かして白齒をすり合はせるものにきまつてゐる。それにあの脚は何だ。前は

前後は後で、人間と同じ歩き方をするではないか。僕はあんな奇態な動物が出て来る劇は、をかしくて見てゐられない。

「あれは人造の馬だから、致し方がなからうぢやないか。」

「腹の皮がよぢれてとてもたまらないのに、あの馬が出て来て、ちよんまげの男が何かものを云ふと、觀客一同がそつと涙を流してゐる。非科學的な馬を見て涙を流す日本人の心理も僕には解しかねる。」

なるほど奴さん、鹽原多助の「青」を觀たな、と私は直感した。そこでその劇の筋を細々と説明し、馬の姿はとにかく、悲劇だからそれを觀て泣けるのだといひ聞かせたところが、

鹽原多助
河竹新七の作つた戯曲の主人公多助が江戸に出る時、彼の馬、青と別を惜しむ場面がある。

高尾・梅尾
京都の西北郊に
ある紅葉の名所

「悲劇でも何でも、非合理的なものはをかしいのだ。あの馬を観て笑はずに居られるか。」
といつて、アメリカン、ボーイは頑として應じなかつた。
「この子の眼には科學の世界以外何物も映らないのです。何とかしてまことの心の眼を開かせたいものです。」とベアード夫人はしみじみ語つて居たが、秋たけて高尾・梅尾が紅葉に燃える頃、博士一行は相伴なうて京洛の地を訪れた。そして洛北の風光をめでつゝ、修學院の御庭にはいつたが、玉砂利のきしむ清掃された道を踏んで、紅葉色濃き丘の上に立つた時、古雅な茶亭を眺めつゝ、閑寂な境域を清らかに

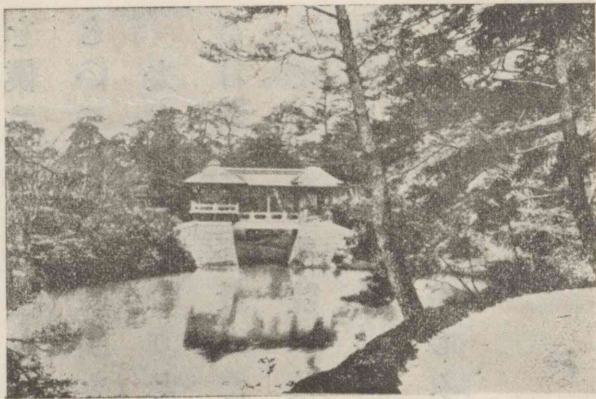
高尾・梅尾
京都の西北郊に
ある紅葉の名所

流れるせゝらぎの音に耳をすましたアメリカン、ボーイは、

驚異の眼を見はつて、じつとたゞずんだ。

瞑想暫し、さら／＼と落ちる銀杏の葉の音に夢からさめたのか、彼は突如「マザー！」と呼びかけた。そして、

「世の中にこれほどうるはしい世界があつたのでせうか。電氣の世界、機械の世界以外に、神が人に賜はつたうるはしい世界がある。清楚な、閑寂な、美そのものと



修學院離宮

もいふべきこの庭園。人間の手になつた至上至高のものを僕は今さどつたと思ひます。」

といつて慈母の顔を仰ぎ見た。

夫人はにっこりと笑つて、「中つた外はさうもさうでもない。」

「日本に來た最大なたまものは、あなたの心眼が開けたことです。修學院の秋！ 何といふ美しさ！ 何といふ美

しさ！」

といつて、記念のもみぢ葉を拾ひ上げた。

(隨筆不定芽)

八波則吉
國文學者。

伏見の城
京都市伏見區に
舊址がある。
上杉景勝
謙信の養子。元
和九年歿、年六
十九。

一一 形見の鎧

八波 則吉

慶長五年八月朔日、鳥居元忠が伏見の城で戦死した。

これより先、徳川家康が上杉景勝を伐つため奥州へ下らうとした時、上方に事變の勃發すべきを察して、譜代の功臣鳥居彦右衛門元忠を伏見の城に留めて、萬一に備へさせた。果して事變が勃發した。即ち石田三成等が事を構へ、上方の軍勢都合九萬三千七百人、伏見の城に殺到した。元忠は寡兵を以て克く防ぎ戦つたが、衆寡敵せず、遂に城を枕に討死した。時に年六十二。元忠の手兵三百五十餘人も一

人残らず戦死した。其の時元忠は長刀を脇挟んで、城の石壇に腰を掛け、近づく敵を待つてゐた。處へ、紀州の住人雑賀孫市と名乗つて、槍をしごいて突いてかゝる。元忠長刀取直し、當城の大將鳥居彦右衛門元忠なるぞ。首取つて功名せよ。かういつて、靜々と壇を下つて討つてかゝる。雑賀孫市、忽ち槍を伏せ、地に蹲つて申す。「公はこれ當城の總大將。下郎如きに御手を下されるは勿體ない。御腹召されるに於ては、恐れながら御首級を賜

はりまする。」元忠莞爾と笑つて、「然らば鎧を脱がして貰はう。」と孫市に手傳はせて鎧を脱ぎ、腹十文字に搔切り、「では早く……」と敵に首を授けた。鳥居元忠の長子新太郎忠政は、出羽の國最上の城主として二十四萬石を賜はつた。元忠が誠忠を徳川家康は一日も忘れなかつたので、香華の地も加はつてゐるといふことである。

香華の地
香華の料として
賜つた土地。

水戸中納言
徳川頼房。家康
の第十一子、私に諡す
戸藩祖、私に諡す
寛文元年薨、年
五十九。

重次
雜賀孫一の名。

次に、元忠が最期に出合せた雜賀孫市は、その後水戸中納言家に仕へて三千石を食み、家老に准ぜられた。美談はこれから始まる。或日、雜賀孫市が使者を鳥居忠政が許に遣はし、次のやうに言入れた。

「重次先年御父君の御最期に参り合ひ、その時の御物具を私宅に藏めてゐます。御形見として御覽に供したく存じますが、貴意如何でせうか。」

忠政は非常に悦び、
「御好意千萬忝く存じます。亡父の形見これに過ぎた物はありません。何卒一目見せて戴きたく、御願ひ申します。」

と答へた。

使者が歸ると間もなく、雜賀孫市重次は、水戸からわざわざ元忠の武具を携へて、遠路出羽最上の城へ出かけた。

忠政は門外に出迎へ、奥へ請じて長途の疲勞を犒つた。

此の日忠政が重次を饗應した歡待ぶりは、誠に善盡くし美盡くし、外の見る目も美しい程であつた。

さて、甲冑、太刀、刀などを床の間に飾り、忠政は涙をはらはらと流してこれを拜み、

「亡父最期の出立が目の前に浮んで、思はず落涙仕りました。御蔭を以て亡父に再び對面するの喜を得ました。此の御恩は永く忘却致しません。」

といつて厚く禮を述べた。

翌日、主人の忠政は、改めて客の重次に向つて、
「此の度の御芳志謝するに言葉もありません。幸に亡父の最期の物具を拜み得たこと、返すも有難く存じます。就きましては、父が形見の品物で、拙宅に傳へてゐますものが、物具其の他に數々あります。で、此の物具——折角御持參下さいました甲冑、太刀、刀の箱は、見苦しうはございますが、貴邸に留め置かれて、永く御子孫に御傳へ下さいませぬか。弓矢取る身の道にも叶ひ、且は御子孫への善い御遺誠とも存じますれば、此の儀御聞届けを願ひます。」
と、條理を盡くして、件くだの物具を雜賀氏へ返した。雜賀氏は

痛く感じて、

「然らば貴意に従ひます。」
といつて、これまた厚く禮を述べて、元忠最期の物具を持つて水戸に歸つた。言ふまでもなく、雜賀氏の家寶となつて、元忠の物具は永く同家に祕藏された。

話は後日談に移る。

鳥居忠政は、さすがに父の子ほどあつて、誠忠眞摯の武人であつた。雜賀孫市に對して、

「此の御恩は永く忘却致しません。」
と言つた言葉に違はず、爾後年々、冬の頃になれば、綿を厚く入れた衣類四五領、使者に持たせて遙々水戸へ送り遣はし、

音信を通ずる事、忠政が一生の間終に怠ることがなかつた。水戸中納言頼房卿が此の由を傳へ聞かれて、
「これは近頃奇特な事だ。」

と仰せられて、爾後、毎年忠政の使者が來る頃になれば、必ず道路を修理させられ、又雜賀の宅へは魚鳥の類を送つて、使者招待の料に資せられた。而して、此の事も亦久しく、年々變る所がなかつたといふ。

水戸威公といひ、鳥居忠政といひ、又雜賀孫市といひ、いづれも義理堅い古武士の典型、其の行爲は善行の三巴さんぱとして、後世永く傳へて世道人心に裨益けいやくを與へるものだといふ。

(高きに登る)

一二 森の繪

吉村 冬彦

吉村冬彦
本名寺田寅彦。
理學博士。昭和
十年歿、年五十
八。

暖かい縁に背を丸くして横になる。小枝の先に散残つた枯れ木の紅葉が、目に見えぬ風にふるへ、時に蠅のやうな小さい蟲が、小春の日光を浴びて垣根の日陰を斜に閃く。眩しくなつた眼を室内へ移して鴨居を見ると、こゝにも初冬の「森の繪」の額が薄ら寒く懸かつて居る。
中景の右の方は檜か何かの森で、灰色をした逞しい大きな幹はすく〜と立竝んで、次第に暗い奥の方へつゞく。隙間もない茂みの緑は霜に稍さびびて、得も云はぬ色彩が梢から梢へと柔かにうつり變つて居る。コバルトの空には

王子色の綿雲が流れて、遠景の廣野の果ての丘陵に紫の影を落す。森のはづれから近景へかけて、石ころの多い小徑がうねつて出る處を、橙色の服を着た豆大の人が、長い棒を杖にし、前に五六頭の牛・羊を追うて、とぼく／＼出て来る。近景には低い灌木が處々茂つて、中には箒のやうな枝に枯葉が僅かにくつついて居るのもある。

あちらこちらに切倒された大木の下から、眞青な羊齒の鋸葉が覗いて居る。



吉村冬彦

寧ろ平凡な畫題で、作者もわからぬ。が、自分は此の繪を

見る度に、静かな田舎の空氣が畫面から流れ出て、森の香は薫り、鶉の叫を聞くやうな氣がする。その外に、まだ何だか胸に響くやうな鋭い喜と悲の念が湧いて来る。

廿年前の我が家のすぐ隣は、叔父の屋敷、從兄の信さんの宅であつた。裏畑の竹藪の中の小徑から我が家と往來が出来て、垣の向ふから熟柿が覗けば此方から烏瓜が笑ふ。藪の中に一本、大きな赤椿があつて、鶉の渡る頃は、落散る花を笹の枝に貫いて軍遊びの陣屋を飾つた。樹の空には「ご」を仕掛けて鶉を捕つた事もある。

叔父の家は富んで、奥座敷などは二十疊もあつたらう。美しい毛氈がいつでも敷いてあつて、欄間に木彫の龍の眼

が光つて居た。

いつか信さんの部屋に遊びに行つた時、見馴れぬ繪の額がかゝつて居た。何だと聞いたら、油畫だといつた。其の頃田舎では石版刷の油畫は珍しかつたので、西洋畫といへば、學校の臨畫帖（まがひのてま）より外には見たことのない眼に、初めての此の油畫を見た時の愉快な感じは忘れられぬ。畫はやはり田舎の風景で、ゆるやかな流の岸に水車小屋があつて、柳のやうな木の下に、白い頭巾をかぶつた女が家鴨に餌か何かやつて居る。何處で買つたかと聞いたら、町の新店にこんな繪やもつと大きな美しいのが澤山に来て居る、ナポレオンの戦争の繪があつて、それも欲しかつたといふ。

家へ歸つて夕飯の膳についても、繪の事が心をはなれぬ。黄昏（あづかり）に袖無を羽織つて、母上と裏の垣で寒竹筍を抜きながら、繪の事を思つて居た。夜、薄暗いランプの光で寒竹の皮をむきながら美しい繪を思ひ浮かべて、淋しい母の横顔を見て居たら、急に心細いやうな氣が胸に吹入つて、睫毛に涙がにじんだ。何故泣くかと母に聞かれてなほ悲しかつた。そんなに欲しくば買つて上げる、男の癖にそんな事ではと諭されて、更にしやくり上げた。母は蟲抑への藥を取出して吞ませてくれたが、あの時の自分の心は、今でも説明が出来ぬ。幼く片親の手一つに育つて、餘り豊かでない生活が朧げに胸にしみ、浮世の木枯はもう周圍に迫つて居た。

から、何かの刺戟はすぐに譯のわからぬ悲しみを誘つたのだ。

あくる日、錢を貰つて先づ學校へ行つたが、教場でも時々繪の事に心を奪はれ、先生に何か聞かれても、何を聞かれたか分らぬやうな事もあつた。放課のベルを待兼ねて學校を飛出し、信さんに教はつた新店を尋ねたら、すぐにわかつた。店へはいると、一面につるした繪のニスの香に酔つてしまふ。あれも好い。これも氣に入つた。鍛冶屋の煙突から吹出る眞赤な焰が黒い樹に映えて、遠い森の上に青い月が出て居る繪も欲しかつたが、何となく靜かな此の「森の繪」にきめた。粗末な額縁をはめて貰つて、其の上を大事に

新聞で包んで店を出た時は、心臓が高い音を立てて踊つて居た。

歸り途に舊城の後を通つた。御城の杉の梢は丁度此の繪と同じやうなさびた色をして居て、お濠の石崖の上には葉をふるつた椋の大木が、枯菰の中のつめたい水に影を落して居る。濠に隣つた牧牛舎の柵の中には、親牛と小牛が四五頭愉快さうにからだを横にゆすつてはねて居る。自分もなんだか嬉しくなつて、口笛をびゅつくと鳴らしながら飛ぶやうにして歸つた。

森の繪が引出す記憶には限がない。縦一尺横一尺五寸の粗末な額縁の中には、あらゆる幼時の美しい幻が疊み込

まれて居て、折にふれては畫面に浮び出る。現世の故郷はうつり變つても、畫の中に寫る二十年の昔はさながらに美しい。外の記憶がうすれて來る程、森の繪の記憶は鮮かになつて來る。

他郷に漂浪しても、此の繪だけは捨てずに持つて來た。額縁も古ぼけ、紙も大分煤けたやうだが、森の繪はいつでも新しい。

(藪柑子集)

北原白秋
詩人。

私の草舎
氏は葛飾の寓居
を紫煙草舎と號
してゐた。

一三 雀

北原白秋

庭の澁柿が赤く色づく頃から、私の草舎はまるで雀のお宿見たやうになつてしまひます。葛飾田圃の雀は、その赤い澁柿ばかりを目かけて、四方から群つて來るやうです。さうして澁柿が愈腐つて落ちれば、落ちるほど、集まつて來る雀の数は愈多くなるばかりです。寒さも愈さむくなつて後には、たつた一つしか赤い實は残つてゐません。さうなると、今度は雀が鈴なりになつてしまひます。人家の傍の田を作るものではないといふ話です。見渡

す限りの稲の穂波が、愈、黄金色に色づいて、晩秋の風にさわさわとゆれ立つ頃になると、所謂千羽雀の時節になります。その雀の数の多い事は全く千羽雀といつても千羽位の數



ではありません。何千何萬とも知れぬ雀の群集が、彼方にも、此方にも、黒胡麻のやうに亂れ落

ちたり飛上つたり、遙かの空から、稲の穂波とすれすれに金色に光つて、羽ばたき羽ばたき雪崩れて來るかと思ふと、思ひがけない近くの田圃から、又入れ代りに亂れ立つて逃げ

本所
東京市本所區。

たり、又は專念に向ひ風に羽ばたく雀、激しく吹分けられて、二羽三羽と方々へ外れて、向き〜に頭を縮めて羽ばたく雀、たつた一羽になつて、翼を細かにちぎれるほど振切つて、何處へ行くとも知れず、小さく飛んでゆく雀、さういふものが、唯の一羽でも鳴きたてぬのはないのだから、その騒がしさ、喧しさといふものは無いのです。取分けて、赤い〜太陽が、本所邊の濛々と煙つてゐる幾百とも知れぬ大煙突の向ふに落ちかゝつて、西方一面に寒々と赤く反射する日の暮れ時の群雀の喧しさは、全く耳が金聲になるばかりです。百姓の方でも堪らなくなつて、ほう〜と田圃に出て追つては居ますが、その聲の寂しい事といつたらありません。

追はれる雀は伶俐です。自分達の下りてゐる田から、一番近い家の庭の木立を目がけて逃げて來るのです。ほうほうと羽音をたてて、まるで驟雨の襲うて來るあわたしきさで、一時に逃げて來ます。そして樹の上で一しきり鳴き騒ぎながら、一つには様子を仔細に觀、二つには疲を休めて新しい元氣をつけると、また向ふへ行つた百姓の後から、元の田圃へ一齊に飛びおひる、また追はれて逃げて來るといふ風です。それが朝から晩までだからたまりません。逃場所のある家の近くの田圃などは、一番に荒らされてしまふわけです。この時節こそ雀の一番の收穫時であつて、雀は全く欣喜雀躍です。少々遠くの都會からでも、この頃は晝

は總出で出稼ぎに來ます。葛飾でなくとも、田圃があるかぎり、雀はそこらの電線や木の上に鈴なりです。

赤い夕燒の空に、火の見梯子が遠見に染まり、近くの電線に雀が尻上りや肱立てをやつたり、まるで器械體操か輕業見たやうな身振りで、前後も知らずに踊り返つて居ます。

愈々さむい冬の日が近づくと、道端に架けわたした稻掛の上にも、何羽となく雀が日向ぼつこをはじめます。

村社の壞れかけた石の鳥居や、色の褪せた赤い鳥居にも、稻束がかけ連ねてあるとその上にも、雀が行儀よく一列に竝んで、刈りつくして廣々となつた田圃續きを眺めたり、落穂拾ひの寒々しげな姿を見下したり、遙かに天の一方に眞

白くなつた富士の山の神々しさを仰いだりしてゐます。ともすると、非常によく晴れた日などは、稍、小高みの丘の祠の千木の頂邊ちうべんから、一羽の雀がちよんととまつて、日和見をしてゐる、澄みきつた姿さへ見受けます。さうして幾日か寒々しい日が續くと、いよゝゝ霰まじりの粉雪が降つて來ます。さうして百姓もちゝかめば、雀もちゝかんで、何時の間、にやら自然とお爺さんくさくなつてしまふのです。

耕作車の車輪を二つともはづして、背戸の檜垣に立てかけてあると、夜の内に置いたか、夜明けには霜に眞白くなつてゐます。その車輪の霜の上にも、雀が珍しさうにとまつたり、つつ突いて見たり、蔭の黍殻の霜の上に飛びおりたり

してゐます。かういふ景色も冬のわびしさです。

二

松風の音が澄み、雀の聲が澄む。其の松原を大きな櫓權を擔かちいで來る漁師の姿もいゝものです。松葉搔く鄙の娘、松の根方に度どましく聖書をひもとく女、その閑寂ひらびとした砂濱の上に、時折かさりと落ちる音は枯れゝの松笠です。それは雀が落したのです。

ほのゝと鹽焼く煙、その煙にも目醒めて雀は羽ばたきます。ちつくと、紅い朝焼けの海の空へと翔けぬけます。網を高く干した漁村の秋日和、または三色の吹流しや、鯉轍こいのはためく初夏の景情も、近寄つて見れば、雀が三叉さんまたの上

に留つたり、傾いた鳥居の桁などに竝んでゐるものです。磯端の惠美須宮、その雨曝しの石の祠の上にも、蓆の上にも、干し竝べた秋刀魚や煎餅の傍にも、やはり磯臭い雀が遊んでゐます。さうして向ふには銀碧の漣がかぎりもなく水平線まで續いてゐます。

大海の前に住む人間も寂しいが、雀も寂しい。たゞ終日、毎日同じやうな波の連続と運動ばかりを見て暮すのです。漁村の雀は全く磯臭い。漁師臭い。そして、あの腥い生魚の臭にも馴れきつてしまつてゐます。漁師が干す鮪網の澁色そつくりです。船腹の赤い蒸汽のあの、油臭い船艙のほひ、さういふものまでが染みついてゐるやうです。

同じく海の近くにせよ、稍離れた小高みの丘や、山の尾の庵寺あたりの住居になると、流石にまた趣が變ります。磯の松風より更に澄徹つた松風の音の中に、更に冷たい大寒の雀の聲がします。その冬の夜明の度ましさは又格別です。さういふ大氣の中では、たつた一羽の子雀が啼立てても、山の中に響きます。それが高い大木の古松の枝々から、一齊に啼立てるのです。姿も見せないくらゐの細かな雀が、下からよくよく見上げると、一つ一つ動いてゐます。時には、ちちつちつと、二羽三羽づゝ、薄玻璃のやうな空の穹窿へ、翼を振りくゞ飛立ちます。少し下では三四本の孟宗竹などが寒々と風に揺いてゐ

ると、いつの間にか朝の光が射しかけて、笹の葉さきにちらちらします。すると、小學校の子供の騒ぎが、急に山裾から湧き出して来る。その頃の丘の雀の騒ぎと來たら、また一人です。丘の上から瞰下した漁村の姿も、何といつても人間の部落です。静かな境涯から静かな心で觀れば、それは静かなものです。親しい人里です。

日が高くなると、丘の上ではまた子雀一匹ゐなくなつてしまふ。それは不思議です。やはり人里が戀しくて下りて行かねばならぬものと見えます。木魚や鉦の音ばかりでは雀も寂しいか、腥くてもやつぱり在家の厨に飛んで行きます。

(雀の生活)

南條文雄

佛教學者。文學博士。昭和二年歿。年七十九。

雲華上人

名は大合。畫僧。嘉永三年歿。年七十八。

賴山陽

名は襄。通稱は久太郎。詩人、史家。天保三年歿。年五十三。

耶馬溪

大分縣下毛郡山國谷。

八代

熊本縣八代郡八代町。

法海

眞宗の僧。號は橘州。天保五年寂。年六十七。

一四 知行合一

南條文雄

豊前の山國谷に正行寺といふ眞宗の寺がある。住職雲華上人は文學を好み、書畫を能くし、廣く文人墨客と交はり、別して賴山陽とは無二の親友であつた。山陽は三十九の年に九州を遊歴したが、山國谷の景勝を探つたのは雲華上人の手引であつた。山陽が「耶馬の溪山は天下に比なし」と激賞してから、山國谷は耶馬溪として天下に著聞するに至つたのである。

當時、肥後國八代の光徳寺に易行院法海といふ學徳共に高い眞宗の僧があつた。山陽は遊歴の途次、豫て雲華上人

より得た紹介を以て、遙々と法海師を尋ね行き、頼久太郎、老

師の高名を慕うてお尋ね

申した。お取次をお願い

申す」と申し入れた。折柄

机の前に端坐して讀經し

てゐた老師は、やをら起つ

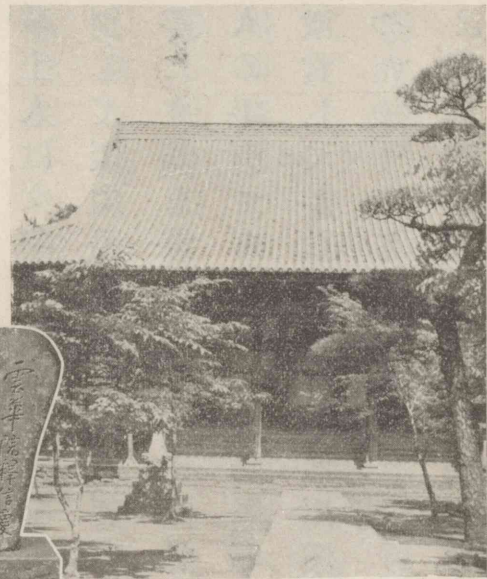
て、山陽に面會した。山陽

は初見の挨拶をすませて

から、自分の書いた「楠公傳」

の稿本を懐から取出した。そして慇懃に「老師の御批評を」

と言つた。老師はその表紙にちらと一瞥を與へたまゝで、



正行寺と雲華上人の墓

手に取らうともしなかつた。さうして、靜かに口を切つた。

「この頃噂に聞けば、藝州の儒者で頼久太郎とやらいふも

の、京へ出て酒許り飲んでゐて、三

年が間唯の一度も歸省して親の

安否を尋ねようともせず、そして

忠臣楠公の傳を作つたといふ事

だが、では御邊の事でござつたか。

この時、法海師の鋭い眼光は山陽

の面上を電のやりに射た。山陽は我知らず面を伏せた。

法海師は更に語を繼いで、「忠臣は必ず孝子の門に出づ」とは

古人の金言だが、三年も歸省せぬ不孝者の筆を以て忠臣の



頼山陽

の面上を電のやりに射た。山陽は我知らず面を伏せた。

傳を書くとは、大それた事ではないか。楠公の靈、若し知る
 あらば、果して何と思はれるであらう。愚僧もそんな不孝
 者には會ひたうない。老師はかく言ひ終つて、すつと起つ
 て元の座に歸り、靜かに讀經する事初の如くであつた。
 程經て、やつと頭を擧げた山陽は、冷たい汗が首筋を傳う
 て流れるのに氣が附いた。が、今は取着く島もない。老師
 の前に默禮して寺門を出た。

「さすが一宗の學頭、偉い和尚だ。」これが當時文名一世に
 鳴る豪快無比の山陽の腹の底から搾り出された感歎の辭
 であつた。

あとで雲華上人に一部始終を話すと、上人は如何にも我

陽明學

王陽明の唱へた
 知行合一の學
 說。陽明は明の
 大儒。

夏日の日云々

「冬日は愛すべ
 く、夏日は畏る
 べし。」

(左傳注)

が意を得たといふやうに「さうであつたか。それはよく言
 つてくれた。貴公は豫て陽明學をやつてゐるではないか。
 知行合一、今こそそれを實行すべき時である。」といつた。

山陽は覺えず立上つて、「法海師は夏日の日、上人は冬日の
 日だ。」といふや否や、早々行李をととのへ、翌日早朝に發足し
 て、老母の膝下に歸省すべく安藝の國へと急いだ。

山陽はその後年々歸省して老母を慰め、又これを京都に
 迎へ、吉野や伊勢にお伴して孝養を盡し、數々の美談を遺し
 たが、基づく所は兩師の言を虚心に受入れた爲である。「虚
 にして往き、實にして歸る」とは、實にこの事で、山陽が善く學
 ぶ所に背かなかつたのも、全くこれによるのである。(修養錄)

福澤諭吉

教育家。慶應義
塾の創立者。明
治三十四年歿、
年六十八。

一五 人間の三いろ

福澤 諭吉

人間の智愚強弱は様々にして、上智と下愚と、至強と至弱とを比較すれば、同じ人類とは思はれざる程の相違なれども、社會の經濟上より見る時は、概して之を三等に分つべし。不具癡疾の者は、天然の不幸としてこれを除き、生來屈強の身體にてありながら、何等の才能もなく、たゞ安閑として飲食し、甚だしきは放蕩無賴、つねに他人の厄介となるのみか、やゝもすれば他を害して自分の慾を逞しうせんとする者あり。これ最下等の人にして、社會全般の爲に謀れば、此の種類の者は有害無益、俗にいふ娑婆塞ぎの邪魔者なれば、

一人にても其の數の減ずるこそめでたけれ。

一段を上りて、さまで人の世話にもならず、父母妻子と共に衣食するのみにして、かつて戶外のことに關係せず、間接にも直接にも人に教へたる事なく、又相談に與りたることもなく、一年に得たるものは一年に衣食し盡くして、老後死後の謀を爲すに遑あらず、一軒の家を天地として生れ死するのみ。此の種の人は一國の良民として決して邪魔者にはあらざれども、社會人事の盛衰には關係薄くして、此の世に在りて大いに益するにあらず、無しとて大いに不自由を覺ゆるにあらず、先づ以て中の種類なり。

それより尙上りて、教育の結果または天賦の才力をもつ

て、活潑に立働き、一身一家の獨立すてに成りて世間の累を爲さざる上に、尙一步を進めて他人の相談相手となり、また社會の利害を案じ、自ら自身の地位才力を省み、よく事に當るべきを信じて、すなはち戶外にその頭角を現し、或は私に大いに商賣・工業を企て、或は公に政治上に關係し、或は地方の民利を謀り、或は宗教・教育の先導者となるなど、あたかも一身の働を二分して、一は以て家に居り、一は以て世に處し、公私兩様の爲に力を盡くすもの、これを最上等とす。

以上三種三等の區別は、必ずしもその人の貧富貴賤のみに由らず、時に或は富貴にして厄介者あり、貧賤にして重寶なる人物あり。その仔細を詳かにしてこれを筆端に記す

は、極めて難きことなれども、事實は明白にして世人の常に知るところなり。



福澤諭吉

例へば、一町村、一郡縣に人の死亡することあらんに、これを傳聞してその不幸を悲しむは人情なれども、そのこれを悲しむと同時に又ひそかに私語し、何某の病死、眞に氣の毒なれども、實は地方遠近のためよき厄介拂ひなり、彼の親類身寄も先づ「安心ならん」など言はるゝ者は下等なり。病死の報知に接して、會葬はしたれども、不幸の沙汰はその日限りにして、翌日よりこれを語る者もなきは中等の人物

なり。死亡の新聞に驚くは勿論、病中より様々の噂にて心配の折から、いよゝ不幸を聞いて、地方の人々先づこれを悲しみ、次いでこれを惜しみ、此の人に去られては云々」とて泣く者あり、狼狽する者あり、數年の久しき、なほ人の口の端に残りて消滅せざる者は上等なり。

されば、今、人が偶然にも此の世に生れ出でて、その一身の行狀より居家處世の法に至るまでも、上等にするか、中等にするか、はた下等に陥るか、その上中下の差別は必ずしも學者先生に質問するを要せず、近く地方人心の向背を視察してこれを知るべし。「社會は良師なり」といふ、即ちこれらの事實なるべし。

(福翁百話)

新井白石

名は君美。徳川家宣に仕へて輔翼す。享保十年歿、年六十九。國府今の静岡市。勝重 姓は板倉。徳川氏の世臣。駿府奉行を経て、京都所司代となつた。寛永四年歿、年八十三。



一六 袴のうしろ悪しう候

新井白石

天正十六年、徳川殿駿河の國府に移り住ませ給ふに至りて、多くの御家人ごけいじんの中を擇び給ひて、勝重して此所の町奉行に任せらる。候ごうの活用

初め、勝重を召され、此の職の事仰せ下されしが、其の任に堪へざる由を固く辭し申しけれども、さらに御許ごきよなく、勝重「さらば宿所に罷り歸り、妻にて候者と謀りてこそ御返事をば申すべけれ」と申す。徳川殿笑はせ給ひて、「さもありなん、罷り歸りて相謀れ」と仰せ下さる。妻は勝重が歸るを迎へて、「悦ぶべき事ありと告げ知らする人あり、如何なる幸や候。」

といひけるに、勝重ものをも言はずほくそ笑みて、衣裳ぬぎ棄て座に直り、妻にうち向ひむかされば、今日召されし事、餘の儀にあらず。この度御座所を移さるゝに依りて、かの町の奉行たるべき由を仰せ下さる。如何にも叶ふべからざる旨を辭し申せども御許なし。さらば我が家に歸り、妻に謀り候はんと申して罷り歸りぬ。さて御事ごじは如何にや思ふおもといふ。妻は大いに驚きて、あな淺まし、私事わたくしごとならば夫婦謀るといふこともこそあれ、公にてかゝる事や宣ふべき。まして是は仰せ下さるゝ所なり。殊に其の職に堪へん堪へじは、御心にこそあるべけれ。みづからいかで知り候ふべき。といへば、勝重「いや、我この職に堪へん堪へじは、我が心

一つのみにあらず。御身の心によることにて侍るぞ。まづ心を沈めてよく聞き給へ。古より今に至り、異國にも本朝にも、奉行頭人などいはるゝ者の、其の身を失ひ、其の家を亡ぼさぬは稀なり。或は内縁に就いて訴を斷ること公ならず、或は賄賂に因つて理を判つこと私多し。これらの災は婦人より起る所あり。我若し此の職奉らん後は、親しき人の言寄らん事なりとも、訴訟の事執し給ふまじきか、僅かの贈物參らせて候ふ事ありとも、苞苴の物受け給ふまじきか。これらの事を初として、御事は、勝重の身の上如何なる不思議のことありとも、さし出でもの宣ふまじき由、固く誓ひ給はざらんには、勝重此の職に任ずる事は如何にも叶ふ

べからず。さればこそ御身と謀るべしとは申したれ。といふ。妻つくづくうち聞きて、誠にのたまふ所道理にこそ侍れ。みづからは如何なる誓をも立てなん。とく参りて畏まらせ給へ。といふ。

勝重大いに悦び、神にかけ佛にかけて固き誓を立てさせ、「此の上は思ひ置く事なし。さらば参らん」とて、衣裳ひき繕うて出づ。袴の後腰うしろこしをもぢりて着たり。妻うしろざまに見て、「袴のうしろあしう候。」といひて立寄りて直さんとす。勝重聞きもあへず、「さればこそ、我が妻に謀らんと申ししは誤たざりけれ。勝重が身の上の事如何なる不思議ありとも、さし出でものいはじと誓ひしは今の程ほどぞかし。早くも

忘れ給へりな。この定さだならんには、勝重職承る事かなふべからず」とて、また衣裳ぬぎ捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、さまざまの怠怠状まゐらす。「さらば、その言葉いつまでも忘れ給ふな。」といひて御前に参る。

徳川殿、如何に。汝が妻は何とかいひし」と仰せければ、「妻にて候者が慎みて承れと申し侍る。」と申す。「さこそあらめ」とて、大いに笑はせ給ひしとなり。

(藩翰譜)

湯淺常山
名は元禎。岡山藩士。天明元年歿、年七十四。

嚴有院殿

德川家綱

中山備前守

水戸家の家老

史記

支那上代の歴史の撰。漢の司馬遷の撰。

伯夷

支那周代の人物が弟の叔齊を愛してゐたので長子であつたが、父の家を継ぐを受けず、亦之を受けず互に譲りあひ、遂に仲だ。弟が跡を繼いだ。

一七 德川光圀

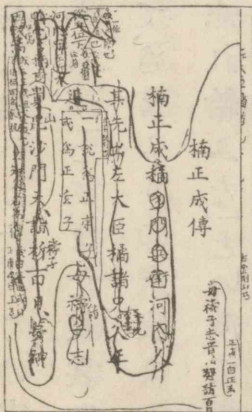
湯淺常山

水戸中納言光圀卿は頼房卿の第三の子、東照宮の御孫なり。

寛永十年威公の嗣未だ定まらざりしかば、嚴有院殿の仰にて中山備前守信吉水戸に至り、光圀卿三つになり給ひしを見て、かくと申し上げて世嗣に定まりぬ。正保二年史記の伯夷傳を讀みて深く感ずる所あり。是嗣は兄の頼重立ち給はん事なるに、かく定まりつれば、長子の

大日本史

旧稿本



大友皇子
弘文天皇。

瑞龍山
茨城縣久慈郡譽田村。水戸市の北方。

方に家を譲るべき志是よりして起れり。是より又學問を好み給ふ志篤し。明暦三年より大日本史を撰び始めらる。大友皇子を天子と定め、吉野朝を正統と立てらる、皆この君の義烈なり。



德川光圀

寛文三年頼房卿逝去あり。葬禮、僧家の法を用ひず、瑞龍山に葬り、威公と諡し、廟を水戸の城中に立てられ、祭祀の儀式を定め給ふ。殉死すべき士ありしに、自らその家に到りて止めらるゝに、その理正しき故に殉死を止まりしかば、この事聞えて殉死天下一統停止の旨

朱之瑜
舜水と號す。
安東省庵
儒者。

仰せ出されしはこの君の故なり。又兄の頼重卿の子松千代綱方を強ひて養嗣とせられんことを乞ひて、若し聞入れられずば世を遁るべき志なりしかば、頼重卿許諾あり。松千代の弟采女綱條をも引取り養ひ給へり。明朝の遺民朱之瑜といひし文學ある者、清朝の粟を食せじとて日本に渡りしを、筑後柳川の文學安東省庵、その俸祿の半ばを分けて養ひ置きしを召して師とし給へり。綱方病によりて卒去ありしかども弟綱條を養ひ置かれし故、即ち世嗣になし給ひぬ。元祿三年領國を綱條卿に譲り給ひ、權中納言に任じ給ひしが、程なく辭表を奉りて、歌に、

位山のぼるもくるし老の身は

ふもとの里ぞ住みよかりける

これより常陸の久慈郡太田郷の西山に引籠り給へり。

後、攝州湊川に楠木正成の墓を修し、碑を立てて、碑面に「嗚呼忠臣楠子之墓」と自筆し、陰には舜水の撰びし贊を彫らせられ、又舜水の碑を瑞龍山に建てられ、その文集を輯して門人源光罔と稱し給へり。

彰考館を作りて和漢の群書を集められしに、遠國他郷に



山西山莊

牧 大野牧。

澗沼 水戸市の東南三里。廣浦ともいふ。

學士を遣はし、半紙一行の反故をも、見るに隨ひ拾ひ收め給ひける程に、色々の書ども編集ありけり。中にも禮儀類典五百卷は日本古來よりの寶典と稱すべしといへり。寛文五年領國中の邪祠三千八百を毀ち捨て、多賀郡に廣野ありしに馬を放ちて牧となし給へり。地の利を盡くす術に心を盡くされ、海參、白魚、昆布を澗沼が浦に撒き、海に蛤を放ち、これより海産物多く出づ。山には漆、椿多く植ゑさせ給ひけり。

元祿十三年西山に逝去あり。義公と諡したりとなり。

(常山紀談)

五十嵐力 國文學者。文學博士。

大隈さん 大隈重信侯。大正十一年歿、年八十五。
黃門 中納言。

一八 旅 信

一 西山莊から

五十嵐 力

今日水戸在の菅谷なる老從兄を訪うた序に、同じ人に案内されて、太田の西山莊をおとづれました。西山莊は義公老後の隱栖で、土地の人から西山御殿と呼ばれる所、大隈さんの謂はゆる最も偉大なる貴族にして同時に最も偉大なる平民黃門光圀卿が、半學者、半政治家、半仙人、半百姓の餘生を送られた所です。最左端なる軒先に一株の老梅をあしらつた丸窓の室は、例の床も違棚も簀の子もない三疊で、義公の特に好まれた書齋です。箒を執つた老翁の白頭のか

げにあたる室は、護衛の家來の詰所兼書物棚のある所です。最右端の奥の室は、義公が土地の百姓等と膝を交へて遠慮のない話がしたいといふ趣意から、敷居をぬきにして二間を續けられた大室で、其の右手には、百姓が厚意のみやげの大根胡瓜などを載せられた、野菜陳列臺ともいふべき狭い長い一種の床板が設けられてあります。

私は義公の理想を小形に取揃へた此の莊の内外を一通り見て、茶菓の接待を受けてから、裏の松山に登りました。そして此の莊から、風情のある心字の池を隔てて近く峙つた見附の松山が、大切な松をしきりに伐採されつゝあるのを見て、背景を削ぎ取られた孤立の西山莊の淋しい姿を豫

想しつゝ、淋しい歸途につきました。

二 菅公配所の榎寺より

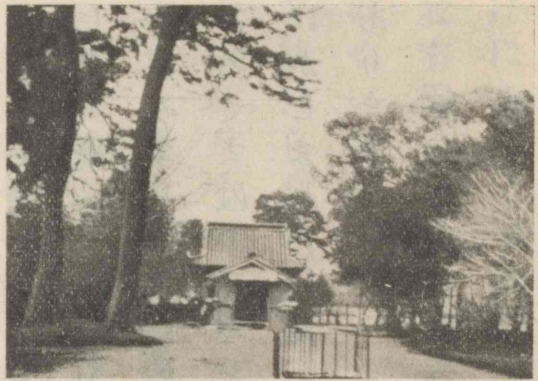
太宰府の天満宮を拜し、都府樓址を見て、それから武藏温泉（○）行く途中、この菅公配所のさびしい榎寺をおとづれました。後に天拜山を負（○）前は青田を通して、左手に都府樓を望み、少し右手に観音寺を望むといふ所で、まはりはことごとく青い田畑にかこまれた、ほんとに淋しい一廓であります。

都府樓纔看瓦色。
観音寺只聽鐘聲。



都府樓址
太宰府の役所の
あと。
武藏温泉
福岡縣二日市の
近くにある温泉

延喜
醍醐天皇の御代。



寺 榎

三 嚴島より

人工と自然との美しく調和したる事嚴島の如きはなし。
低き廣き朱の御社は海中より自然に浮きあがりたる如く、

その鐘の聲をこゝから聞かれたのかと思ふと、延喜の昔をまのあたりに見聞く心地して、疎林の梢に残る夕陽、田の面をわたる夕風、悉く斷腸の種ならぬはありません。
いらかをば たゞ見るばかり、鐘のこゑ たゞ聞くばかり、あはれ榎寺。

彌山と大鳥居との前後に立てるは、山靈驚きめでてこれを護り、人衆悦び敬ひて歸依の眞心を表はせるが如し。
この前を五丈四尺の大鳥居に守らせ、後を二千尺の大彌山に守らせて、低き宮居の平たく落ちつきたる様の見事さは、これを何とかいはん。稱過ぐべからざるは嚴島に候。



社 神 島 嚴

(甲島園書簡集)

白鳥省吾
詩人。

一九 旅 心

白 鳥 省 吾

秋空晴れて、
峠の路は露に濡れ、
漆の葉緋と燃えて、
あけびは熟し、
栗もこぼれる。

峠をおりるわたしたちに
沿うて流れる谷間の水は、
深い樹立の奥にせゝらぎ、

ふなの樹に猿が遊ぶ。
炭を負うてくる逞しい炭焼の女、
路を避けつゝ珍しげに
山のかなたに反響する歌は、
先發の人々の聲か。
あゝ急がうよ、
秋の風さわやかに、
谷間の水も歌ひつゝ、
人里を慕ひゆく旅心。

(明治大正詩選)

國木田獨歩
名は哲夫。小説家。明治四十一年歿、年三十八。

二〇 日の出。

國木田獨歩

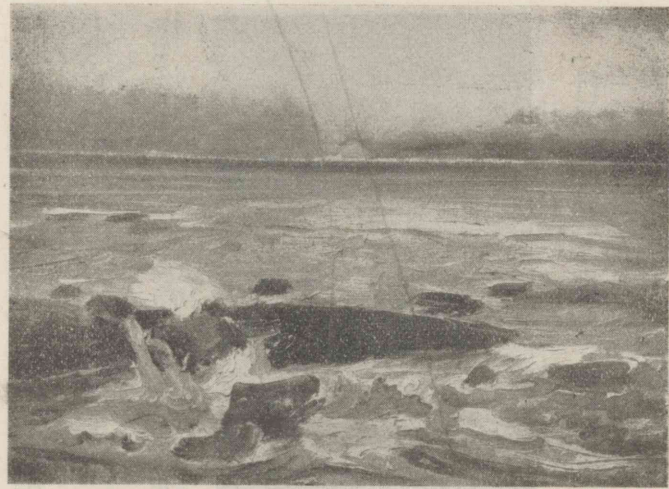
僕が大島小學校に入る僅か四年前に、此の學校は創立されたのです。

それより更に十年前の事、正月元日の朝でした。新年の初光は、今將に青海原の果てから其の第一線を投げし、のめ、の横雲は黄金色に染まり、沖なる島山の頂は紫嵐に包まれ、天地見るとして清新の氣に充たされて居ないものはない時、濱は寂寞として一の人影もなく、穩かに寄せては返す波を弄し、又弄されて、千鳥の群は岩より岩へと飛交うて居



國木田獨歩

ましたが、かゝる際にも、絶望の底に沈んだ人の心は益、闇を求めて迷ふものと見え、一人の若者があつて、蒼ざめた顔を襟に埋め、一つの岩角に蹲つて、頻りと吐息を洩らして居ました。彼は其の覺悟を決めながら、なほためらうて居たので、人の足音に驚いて後を振り返ると、一人の老人が近づいて来る處です。老人が傍に来て、「日が今昇るのを見なさい、何と神々しい景色ではないか」と、優しい言葉をかけるまで、若者は何を思ふ暇もなく、たゞ茫然と老人の顔を見て居たのです。



(筆二武島藤)

「見なさい、今だ、今が初日の出だ」と老人は言ひつゝ、海原遠く眺めて居るので、若者も連れられて沖を眺めました。眞紅の底に黄金色を含んだ一團珠のは、今しも半ば天際を躍り出て、暫したゆたう居る様です。「神々しいぢやないか。人間といふものは、いつでも此の初日の出の光を忘れさへしなればよいのぢや」と老人は感に堪へぬやうに言つて、手を合は

せて静かに禮拜しました。若者も思はず手を合はせました。見るが中に、日は波間を離れ、大空も海原も妙なる光に満ち、老人と若者とは恍惚として此の美景に打たれて居ました。

「私は六十になるが、こんな立派な日の出を見たことはない。來年はこれよりも美しい初日の出を拜みたいものだ。あゝ、よい心持ぢや」と老人は言つて、更に若者に向ひ、

「お前さんは何處の者ぢや」と問ひました。
 「村の者でございます」と、若者は僅かに答へました。老人は其の柔和な顔に微笑を浮べて、
 「毎年初日の出を拜みに出るのか。」

「さうではございません。」

「さうか、それでは今年が初めてだの。昔からも、一年の計は元旦にありといふから、お前さんも今日の日の出を忘れないで居なさい。どうぢや、大變顔の色が悪いやうぢやが、そんな元氣のない顔色をして居ては、世の中を渡れるものではない。一緒に日の出を拜んだのも目出度い縁ぢや。これから私の宅へ来るが、雑煮でも祝はう。」

老人は先に立つて行くので、若者も其の後につき、遂に老人の宅に行つたのです。砂山を越え、竹藪の間の薄暗い路を通ると、士族屋敷に出る。老人は其の屋敷の一つに入りました。

老人の名は大島仁藏、若者の名は池上權藏といふのです。老人は、若者の自殺の覺悟を最初から見取つて居たのですけれども、最後まで直接にさうとは一言も言ひませんでした。

屠蘇を飲ませながら、言葉靜かに言つて聞かした教訓は、決して珍しい説ではなかつたのです。少し理窟を並べる男なら誰でも言ひ得ることなんでした。

朝日が波を躍り出るやうな元氣を、人は何時も持つて居なければならぬ。だから人は、何時も暗い中から起きて、日の出を拜むやうに心掛けなければならぬ。そして日の入るまで、手あたり次第、何でもござれ、其の日にするだけの事

を一心不亂にしなければならぬ。日は毎日出る。人は毎日働け。さうすれば毎晩安らかに眠られる。さうすれば其の翌日は又新しい日の出を拜むことが出来る。一日働いて一日送れば、それが人の一生涯である。日の出る時に人は生れて、日の入る時に人は死ぬのである。

老人の言聞かした言葉は、先づこんなものでありました。そして權藏は奮ひ起つて老人の許を去つたのです。

二

池上權藏は此の日から生れ變りました。固より強健な體軀を持つて居て、元氣も盛んな男ではありましたが、放蕩に放蕩を重ねた結果、親讓の田地は殆ど消えて無くなり、家

屋敷まで人手に渡りかけたので、遂に失望落膽し、今更世間へも面目なく、果ては思ひ迫つて大いに決心して居たのです。けれども彼は此の日から生れ變りました。

一日又一日、彼は稼ぎに稼ぎ、百姓仕事は勿論、炭も焼けば、材木も切出す、養蠶もやり、地木綿（この糸も織り）も織り、凡そ農家の力を出來ることなら、何でも手當り次第。そして一生懸命にやりました。五年目には田地も取返し、畑は以前より殖え、山懷（山懐）の荒地は美事な桑園と變じ、村内でも屈指の富有な百姓と成りおほせたのです。しかも彼の労働辛苦は、初と少しも變らないのです。

大島老人の病床に侍して、最後の教訓を彼が求めた時、老

人は静かに、

「お前さんは日の出を覺えて居なさるか。」

「毎朝拜んで居ります。」

「お前さんは日の出の盛な處を見て、元氣よく働いたのは宜しい。これからは、其の美しい處を見て、美しい働をもするがよからう。美しい事を。」

權藏は暫く考へて居たが、

「それでは先づどんな事をすれば宜しうございませう。」と問ひました。老人は目を閉ぢたまゝ、

「それはお前さんが考へなければならん。お前さんの心で、これは美しいことだと思ふこと、日の出を見てあゝ美し

いと思ふと同じやうな事ならば、何でも宜しい。お前さんは日の出を拜むだらう。」

「へい拜みます。」

「それなら拜まれるほどのことをなさい。」

「及びもつかん事でござります。勿體ないことでござります。」と、權藏は平伏しました。

「いや、さうでない。お前さんは日の出の元氣を忘れましたか。」と言はれて、權藏は、

「解りました。有難う存じます。」と言つたきり、感泣して暫くは頭を上げ得ませんでした。

大島仁藏翁の死後、權藏は一時守本尊を失つた體で、頗る

鬱ふさいで居ましたが、それも少しばし時で、忽ちもとの元氣を恢復し、のみならず、以前に増して働きました。

鬱ふさいで居たのは考へて居たのです。彼は老人の最後の教訓を暫時も忘れる事が出来ないので、拜まれる程の美しい事をするには何をしたらよからうと、一心に考へたのです。神々しい朝日に向つて祈念を凝こららした事もあつたのです。そして、ふと思ひ當つた時には、彼は思はず躍り上つて喜んださうです。

「自分は大島先生を拜んでも尙足りない程に思ふ。それならば大島先生のやうな事をすればよい。」
そこで學校を建てたる決心が彼の心に湧いたのです。

彼の決心の餘り露骨で單純なことを笑ふものがあるかも知れませんが、しかし元來教育のない一個の百姓です、寧ろ其の心ばせの眞率で無邪氣なところを、美しいと感じなければなりません。

兎も角も、此の決心が定まると、彼は更に五年の間眞黒になつて働き、そして遂に一の小學校を創立して、これを大島仁藏の一子大島伸一に獻じ、大島小學校と命名して、老先生の記念となし、一切の事を若先生伸一に任せましたのです。これが大島小學校の由來でございます。

(獨歩全集)

菊地幽芳
名は清。小説家。

二一 最後の授業

菊地 幽芳

その朝僕は學校に行くのがよほど遅くなつた。一つ學校を休んで野良遊をしてやれと、そんな考がふと僕の頭に起つた。天氣はほかく、暖いし、その上空はからつと晴れてゐるんだ。森のはたでは、おしやべりの黒鳥が囀つて居り、牧場では木挽小舎の後の方でプロシヤ兵が訓練をやつてゐる。村役場の前を通りかゝると、小さな鐵柵のある揭示場の前に大勢の人がたかつて居た。二年この方、あらひざらひ

プロシヤ
ドイツの一部。

の不吉の報知や、負けた戦報や、徴發の事や、プロシヤ方のいろいろの命令や、そんないやなもの、がみんなこゝから來たのだ。また何かあるんだなと考へながら、足も止めず、息を切らしながら、アメル先生の小さな校庭へ入つて行つた。開いて居る窓から見ると、僕の仲間はもうみんなめいめいの腰掛に並んで居て、アメル先生は恐ろしい鐵の定木を抱へ込みながら、その前を行つたり來たりして居る。僕は戸を開けてその恐ろしく寂とした中へ入つて行かなければならないのだ。僕はどんなに赤い顔をして、どんなに恐い思をしたかとみんなは思ふだらう。

ところがさうではなかつた。アメル先生は僕を見ても怒らずに、たいそう優しく云つた。

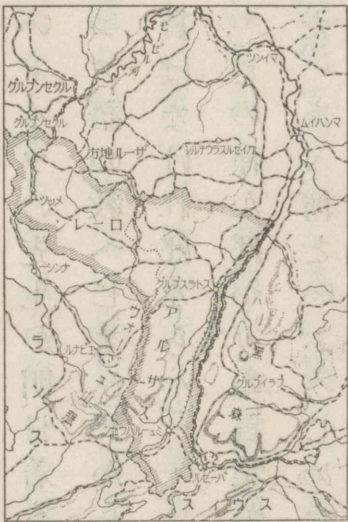
「お、俺のフランク坊か。早く席へ着くがよい。お前が来なくても今始めるところだつた。」

僕は腰掛を飛越えながら、僕の机の前に坐つた。少し恐怖の念が静まつて来ると、僕は僕等の先生が青色の上等のフロツクを着て、參觀日か賞品授與式の折でなければ被る事もない縁取の黒のシルクハットを被つて居るのに氣がついた。そればかりか、教場には何か非常の事でもありさうで、嚴かな空氣が満渡つて居た。

しかし一番僕の驚いたのは、教場の奥の方の、いつも空虚

な机の前に、村の人が僕等とおなじに黙つて坐つて居る事だつた。その人達の中には、三角帽を被つたオーゼー爺さん、前の村長さん、前の競賣吏員さんなどが居た。そしてこの人達はみんな悲しさを顔をして居るのだ。オーゼー爺さんは縁の蝕んだ古いABCの讀本を持つて来て、それを膝の上に乗せ、大きな眼鏡を開いた頁の上に置いて居た。

僕が驚いて居る間に、アメル先生は講座に上つて行つた。そして優しいしかも嚴格な聲で僕等に言つた。



州ンレーロ・スサルア

アルサス・ローレン
三十年戦争の後
フランス領とな
つたが、西紀一
八七〇年の普佛
戦争の結果ドイ
ツ領となり、歐
洲大戦で再びフ
ランス領となつ
た。

「俺の子供達、これがお前達に俺の教へる最後の授業だ。ベルリンから命令が来て、アルサスとローレンの小學校では、ドイツ語の外教へてはならぬと云つて來たのだ。新しいドイツの先生が明日着く事になつて居る。今日はフランス語の教へじまひだから、俺はお前達に一生懸命聞いて貰はなければならん。」

この僅かばかりの言葉が僕をあつと顛倒させてしまつた。あゝ、何といふみじめな事だ。村役場の揭示はその事だつたのだ。僕がフランス語の學びじまひ。その僕はまだろくろく書く事さへも出來ないのだ。も

う僕は習ふ事も出來ない。もうこれで行止りなんだと思ふと、學校を休んで禽の巢を探し廻つたり、河で氷を滑つたりして、無駄に費した時間が今更怨めしくなつた。つい今の先まで、あんなに厭だつたり、持つのを重たがつたりした教科書、文典の本も宗教の本も今となつては、別れのつらい舊い友達のやうな氣がした。アメル先生とてもその通りだ。先生は學校を立去るのだ、もう先生を見る事も出來なくなるのだと思ふと、僕は罰則に逢つた事も、定木で打たれた事も、何もかも忘れてしまつた。

あゝ、かはいさうな先生。先生が取つて置きの着物を着て來たのも、この最後の授

業に敬意を表するためだつた。村の老人達が教場へ来て居るわけも、僕には今始めて讀めた。この人達の様子も、今迄この學校へ度々來なかつたことを悔むやうに見えた。この人達の來たのは、四十年もこの小學校に居て立派な職務を盡くしてくれた僕等の先生に、感謝の意を表するためでもあつたし、また失はれた祖國に對する義務を盡くすためでもあつたらしく思はれた。

僕がこんな事を考へて居る時、僕の名を呼ばれたのに氣がついた。僕の誦する番が來たのだ。ところが僕は最初の言葉にまごついてしまつた。胸が一杯にこみ上げて來て、顔を上げる事も出來ず、腰掛から立つたまゝ、身體の權

衡を取つて居ると、アメル先生の言ふ聲が聞えた。

「フランツ坊や、俺は今日はお前を罰しはせぬ。しかしお前は罰せられるのが當然だ。お前などは毎日きまつて言つて居た事だ、いつでも時間はあるんだ。明日勉強すればいい。」どうだな。今日といふ今日、その結果がお前にわかつたらう。全體アルサス人の教育を、いつもその通りに明日に延ばして居たのがアルサス州の何よりの不幸だつたのだ。今になると、敵國の奴等はいふだらう、「何だ、貴様達はそれでもフランス人だといふのか。フランス語が書けも讀めもしない癖に。」それに何と返事が出来る。」

先生の言葉はそれからそれへと盡きなかつたが、今度は

フランス語の事について話し出した。先生は、フランス語は世界で一番美しい、一番明瞭な言葉だから、われわれはこの言葉をよく護つて、決してそれを忘れてはならない。たとひ一國民が奴隸の境遇に落ちようとも、その國の言葉を護つて居る間は、丁度牢屋の鍵を持つて居るやうなものだ」と説いた。

そして先生は文典を取つて僕等に讀んで聞かせた。僕は自分でよくそれが解つて行くのに驚いた。先生の説明が實によく僕の頭へはいつて行くのだ。僕はこんなによく先生の云ふ事を聞いて居た事もなければ、先生もこんなに辛抱して説明した事も無かつたのだ。どうも、この氣の

毒な先生は、こゝを立去るについて、自分の知つて居るだけの事を一遍にみんな僕等の頭へ詰込んで行かうとするやうに思はれた。

その課目が終ると、今度は習字の方に移つた。その日先生は、特別に僕等に渡してくれる新しいお手本を用意して來た。そのお手本には、美しい丁寧な丸い字で、「フランス、アルサス、フランス、アルサス」と書いてあつた。めい／＼がどんなに一生懸命字を習つたか、見せたいやうだつた。そして何といふ静かさだらう。たゞ紙をひつかくペンの音が聞えるばかりだ。一番年の行かぬ生徒等さへ一心にちやんと覺悟して、習字の線を傍目も振らず引いて居た。

屋根の上では鳩が低い聲で咽喉を鳴らして居たが、僕はそれを聞きながら考へた。

「鳩も獨逸語で啼くやうに教へられるかしら。」



原作者下デ

先生は終まで僕等を教へる勇氣を持つて居た。習字の後では歴史の稽古があつた。それから後で、一番小さな子等が一齊に聲立ててバ、ブ、ビ、ボ、ブと發音を習つた。すると教場の奥に居たオーゼー爺さんは眼鏡をかけ、兩方の手で持つて來たABCの本を開いて、子供等と一緒に發音し始めた。お爺さん自身も勉強に取りかゝつたのだ。そ

してその聲は感動のために震へて居た。それを聞くと僕等は皆笑ひ泣をしたくなつた。

あゝ、僕はどうしてこの最後の授業を忘れることが出来るよう。

突然お寺の鐘が十二時を報じた。それからアンジェリユーが響いた。同時にプロシヤ兵の喇叭の音が學校の窓の下で鳴り出した。と見ると、アメルさんは蒼青な顔をして講座に立上つた。先生がそんなに大きく見えた事は今までなかつたと僕は思つた。

「俺の友達、おゝ俺の友達、俺は……俺は……」
先生はさう云ひ出したが、何か先生の咽喉へ詰つてしま

アンジェリユー
午の祈禱の鐘。

つた。もうその詞を終ることは出来なかつた。そこで先生はぐるりと黒板の方に向きかへ、白墨の斷片を取つて、力一杯に、そして出来るだけ大きく書いた。

フランス萬歲。

それから先生はそこに止まつて、頭を壁にもせたまゝ、ただ黙つて手で僕等に合圖した。

「もう終末だ。行きなさい。」

(幽芳集)

上田萬年
國語學者。文學
博士。昭和十二
年歿、年七十一。

二二 國語と愛國心

上田萬年



日本語人の心(ウカハツ)

言語は之を話す人民に取りては、恰も其の血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、之を

日本國語にたとへていへば、日本語は日本人の血液なりといひつべし。日本の國體は、この精神的血液にて主として維持せられ、日本の人種はこの最もつよき、最も永く保存せら

るべき鎖の爲に散亂せざるなり。故に大難の一度來るや、此の聲の響くかぎりには、四千萬の同胞は何時にても耳を傾

壽コトホぐ

くるなり、何處までも赴イダいてあくまでも助くるなり、死ぬるまでも盡くすなり。而して一朝慶報イッサイケイホウに接する時は、千島のはても、沖繩のはしも、一齊に君が八千代イツサチモチチノミをことほぎ奉るなり。もしそれ此のことばを外國にて聞くときは、こは實に一種の音楽なり、一種天堂テンノウの福音フクインなり。

かくの如く、其の言語は單に國體の標識となるもののみならず、又同時に一種の教育者、所謂なさせ深き母にてもあるなり。われコノが生るゝやいなや、この母ハハはわれコノを其の膝の上に迎へとり、懇に此の國民的思考力と、此の國民的感動力とを、われコノに教へこみくるゝなり。故に此の母の慈悲は誠に天日の如し。苟も此の國に生れ、此の國

民たり此の國民の子孫たるものは、たれとてこの光を仰が皆々ざらん。

されば言語の上には、われコノが心中に一日も忘れかぬる生活上の記念、殊に人生ニッポンの神代カムヤマトとも謂イハひつべき小兒の頃の記念が結び付き居るものと知るべし。われコノが幼かりし頃、終日の遊びに疲れはてて、すやく眠りにつかんとせし折、その母君は如何にやさしき聲にて寢よとの歌をうたひ給ひしか。頑ツル是コノなき小兒心に、わるふざけなどして打ち廻りし時、われコノの厳しき父君は如何にをこそかに教訓をたれたまひしか。さては隣家の垣によぢて栗の實を拾ひろふに餘念あまのこころなく、或は春のうらゝかなる野邊に蓮華草など

摘みあるきたる、すべて當時よりつかひ來れる言葉は、當時の人名當時の地名と諸共に、何ともいはれぬ快感をわれわれに與ふるなり。續いては小中學校のことば、長じては學生のことば、市民としてのことば、或は又職業により、階級により、地方によりてのことば等、皆それらの生活を此の上に反映す。所謂言語は其の話す人を束縛すとはこの事なり。故に外國にて人となりしか、或は外國人の學校にて外國語の教育のみを受けたる人にあらざるよりは、此の言語の恩澤を蒙り、此の言語に感謝の意を表せざるものなし。

そは如何にまれ、此の自己の言語を論じて其の善惡を言ふは、猶自己の父母を評するに善惡を以てし、自己の故郷を

談ずるに善惡を以てするに均し。理を以てせば或は然らざるを得ざらん。しかもかくの如きは眞の愛にはあらず。眞の愛には選擇の自由なし。此の愛ありて後、初めて國語の事談ずべく、其の保護の事亦計るべし。

されば國民が其の國の言語を尊む事は一の美德にして、偉大なる國民は必ず其の自國語を尊び、決してこれを措いて他の外國語を尊奉せず。

故に偉大なる國民は夙にこれを看破し、情の上より其の自國語を愛し、理の上より其の保護改良に従事し、而して後此の上に確乎たる國家教育を敷設す。こはいふまでもなく、苟も國家教育が、かの博愛教育或は宗教教育とは事替り、

國家の觀念上より其の一員たるに愧ぢざる人物養成を以て目的とするものたる以上は、それは先づ其の國の言語、次に其の國の歴史、この二つをないがしろにして、決して其の功を見ること能はず。これ國民たるものの須臾も忘るべからざる事なり。

(國語のため)

中學國文卷二終

昭和十二年八月五日印刷
 昭和十三年二月十日訂正再版印刷
 昭和十三年二月十四日訂正再版發行



中國學

價	定
卷一	金五拾六錢
卷二	金五拾六錢
卷三	金五拾九錢
卷四	金五拾九錢
卷五	金五拾六錢
卷六	金五拾五錢
卷七	金五拾參錢
卷八	金五拾參錢
卷九	金四拾九錢
卷十	金四拾九錢

編者 東京高等師範學校附屬中學校内
 國語漢文研究會
 代表者 岩井良雄

發行者 東京市神田區駿河臺三丁目一番地
 目 黑 甚

印刷者 東京市京橋區銀座西二丁目三番地
 高橋 郁

發行所


東京市神田區
 駿河臺三丁目一

目 黑 書 店

電話神田一〇五八番・一〇五九番
 振替口座東京二八〇九番

廣島縣立海中學校
 野間隆志

中華國文



中華國文

第一冊

第二冊

第三冊

第四冊

第五冊

第六冊

第七冊

第八冊

第九冊

第十冊

第十一冊

第十二冊

第十三冊

第十四冊

第十五冊

第十六冊

第十七冊

第十八冊

第十九冊

第二十冊

第二十一冊

第二十二冊

第二十三冊

第二十四冊

第二十五冊

第二十六冊

第二十七冊

第二十八冊

第二十九冊

第三十冊

第三十一冊

第三十二冊

第三十三冊

第三十四冊

第三十五冊

第三十六冊

第三十七冊

第三十八冊

第三十九冊

第四十冊

第四十一冊

第四十二冊

第四十三冊

第四十四冊

第四十五冊

第四十六冊

第四十七冊

第四十八冊

第四十九冊

第五十冊

第五十一冊

第五十二冊

第五十三冊

第五十四冊

第五十五冊

第五十六冊

第五十七冊

第五十八冊

第五十九冊

第六十冊

第六十一冊

第六十二冊

第六十三冊

第六十四冊

第六十五冊

第六十六冊

第六十七冊

第六十八冊

第六十九冊

第七十冊

第七十一冊

第七十二冊

第七十三冊

第七十四冊

第七十五冊

第七十六冊

第七十七冊

第七十八冊

第七十九冊

第八十冊

第八十一冊

第八十二冊

第八十三冊

第八十四冊

第八十五冊

第八十六冊

第八十七冊

第八十八冊

第八十九冊

第九十冊

第九十一冊

第九十二冊

第九十三冊

第九十四冊

第九十五冊

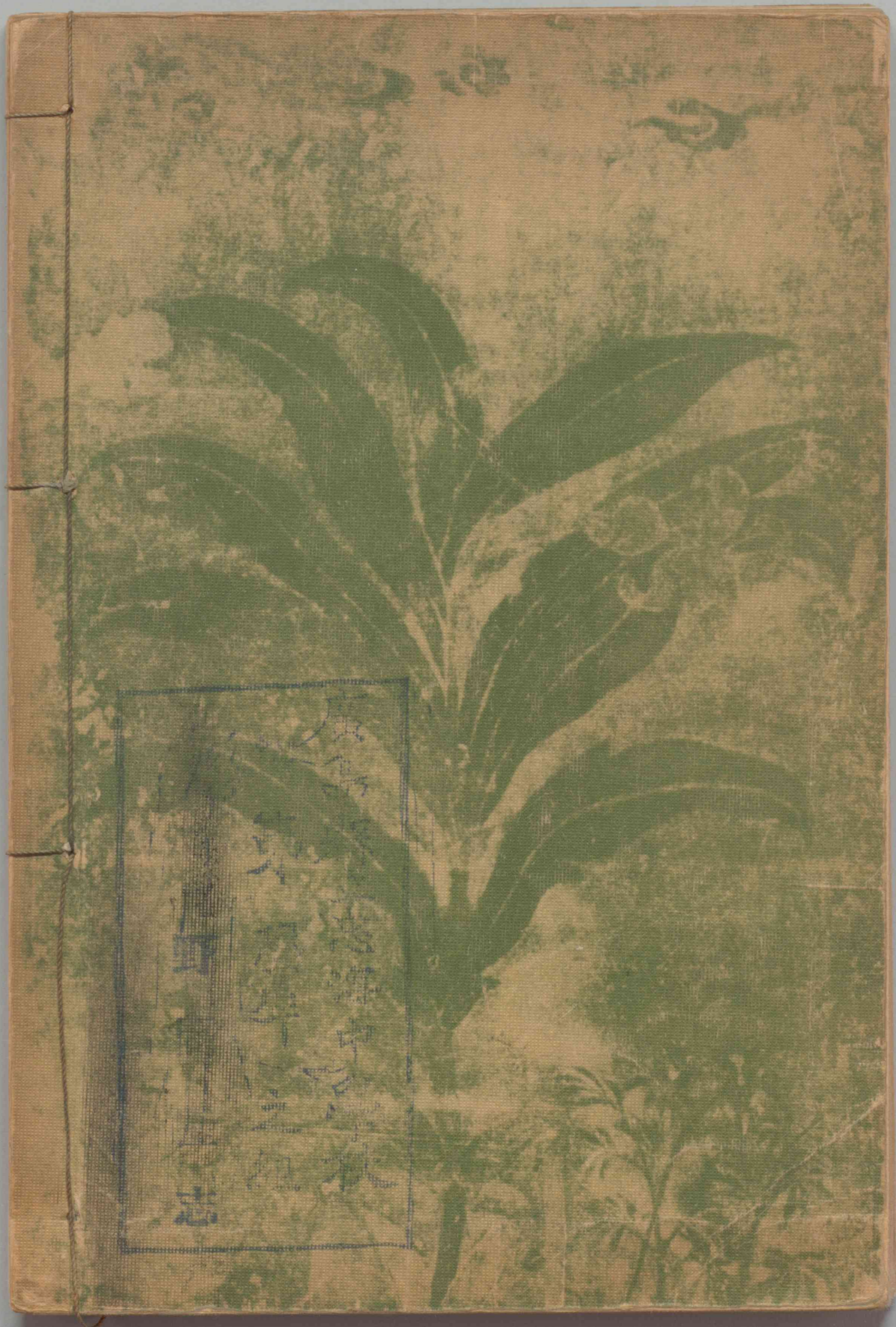
第九十六冊

第九十七冊

第九十八冊

第九十九冊

第一百冊



廣東省城西門外
廣生堂藥行
發行
民國十一年
一月